



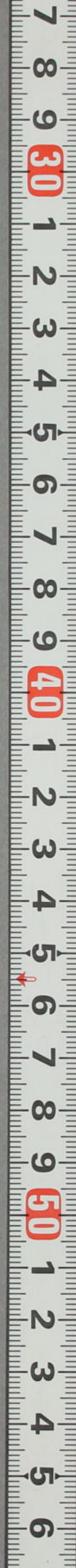
三國
傳來

善光寺如來繪詞傳

二



ハ 4
6207
2



2



いつも心とていれどぶるらみ



いそげ人みぎのしやみおかなふせ



のつれられちるばいりうちたしん

善光寺如来繪詞傳卷二

法印大和尚位權大僧都正空纂述

そもく信濃國善光寺の本尊一光三尊佛その
むうー天竺か出現まゝしことわれろりかどけ
なくも大聖釋迦牟尼如来を經中にとき
たまへりその御經と請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼
呪經とまうーちてまつる 東晉天竺居士竺難提譯

法苑珠林卷七十四引ところ請觀世音大勢至菩薩呪法陀羅尼呪

摩訶止觀十卷
天台大師の説
弘訣十卷
妙樂大師の撰
これ止觀を釈し
なまの書なり
藏經目錄に止
觀二十卷弘訣
四十卷といひ
開合而已
安樂集二卷
道綽禪師の撰

經と題するあり又開元録と按ずる小鳩摩羅什の翻譯するもの經と
同名の經あり菩提流志の譯にも佛入毘耶離除一切鬼病經一卷
ありこれな今經の異譯なりとも惜哉闕本

震旦かて天台大師この經の疏と著したまひ孤山の
智圓ハ闡義鈔と撰し天竺寺の遵式ハ三昧儀と書し
ともふこの經の深理と釋せり加之止觀弘訣安樂集等
にもふにたり我朝めてハ本多善光のためハ三尊
佛にふり光明のうちに三國傳來の事蹟と現て
示したまひと善光筆硯ふうつとおけるを光中

感見の傳といひ略してその濫觴とたづぬるハ一時
釋迦如来毘舍離國菴羅樹園の大林精舍重閣講堂ハ
まゝて千二百五十人の大阿羅漢二萬の大菩薩及
四衆天龍八部人非人等のため説法したまふこのとき
毘舍離國ハ大長者ありその名を月蓋といふもつて
同類の長者五百人ありてともに國の政事を掌る

維摩經の香積品ハ長者の主月蓋八萬人をまゝとせられたるある
文の註ハ羅什三藏のいさゝかの國ハ王なしたる五百の長者國の
政を治む○僧肇法師のいさゝ毘舍離國ハ君王あることなり

たゞ五百の長者ありてともか國事を理む月蓋ハ衆のれ
おのんづるところなりかるがゆゑふ主といふと註維摩經の第
八卷ふにたり○闡義鈔ふも彼國ふ五百の長者あり傳禪て
王となる乃至月蓋と首とあることいそのとき國の主たりと
いへり

故ふ月蓋長者の富貴自在なること餘國の長者の
かよとせらるるところなりまづ樓閣殿舎のまゝまぬふは
金銀をとりぞめ珠玉をかざり七寶の瓔珞をかけ
錦繡の座蓐をつゝぬ一として心よかなりぬことも
なく榮耀榮華の身なれども長者歳五十ふおのび

めるふりまづ一人の子も得ざりければ夫婦ふくこれを
なげきふ五十一歳すてそとめて女子とまうく其
名を如是といふ父母の寵愛かざりなく掌中の玉とぞ
かづきけるあるみこの女子深窓のもとふ養育せられ
錦帳のうちふ成長て十三歳の年月をかぞねけるふその
顔容美麗ことハ春の花の露とふく青柳の風ふびくが
ごとく長者夫婦ハ愛ふおぼれ女子がためふ千金を
つひやももなほ塵芥のごとくおもひけれども生得貪
欲ふくちて人のためとていらさうのやさけもなく

況佛法僧の三寶に歸依せんことありひもあらざるも一國の
首領たる長者かくのごとくなりければ國中の人とも
皆その弊風とまねびて誰ありて大林精舎へ參詣
するものもなかり國中かゝるて慳貪邪見の人ぞ
多りける釋迦如來八月蓋長者の心中をうけて知見
ましませともなほも大慈大悲のふりければこれをあそめ
月蓋一人を濟度せば一國の庶民もかのづから善心をもづく
べりとてひろの方便とめぐるたまりて舍利弗尊者と
めされ汝月蓋もともふゆとて分衛しよりよくバ教化

あて得させとも仰ありければ舍利弗佛勅をうけて即
長者の門ふりて鉢をこいたまふこのとき長者ころに
ありやう凡人ふ物をあらば人まゝにあらめざるをかくも
まうふ此ころ人の如來を供養せざるをまゝに佛はいつも
うくるのまてまゝふかくむらふことなりとりされば
一粒一飯あてもほどこも無益のつひなりものなり
てかくそぐめより手をつけぬまゝうとてむなしく
かくたてまつる如來このうとまこゝめして仰られ
ける舍利弗ハ長者ふ因縁うすまゆまゝん此たびハ

憍梵波提りょうぼんたひまねるべしとてはづめのごとく仰あやせあつてつゝ
たまたま長者ちやうだやかゝやうさまの御弟子かんでと供養くやうせむて
いまこの御弟子かんでと供養くやうせば先の御弟子かんでうらなたまふ
べしとてそれまゝむなしくかくしたてまつる其後そののち如來の
御子かんとあてまゝも羅睺羅尊者らごらそんじやをつゝハたまたまに
このとき長者ちやうだやもつゝみ見てこの人ひとハ釋迦如來しやくたがらういま王宮わうきゆうに
まゝく悉達太子しつたたいとまうしとてこの御子かんとなれば正ただしく
淨飯大王じやうはんたいわうの御孫みそんなりかるたとき御身かみのまが門かどに
たまたまとやうかへたてまつらんいざ供養くやうせむと

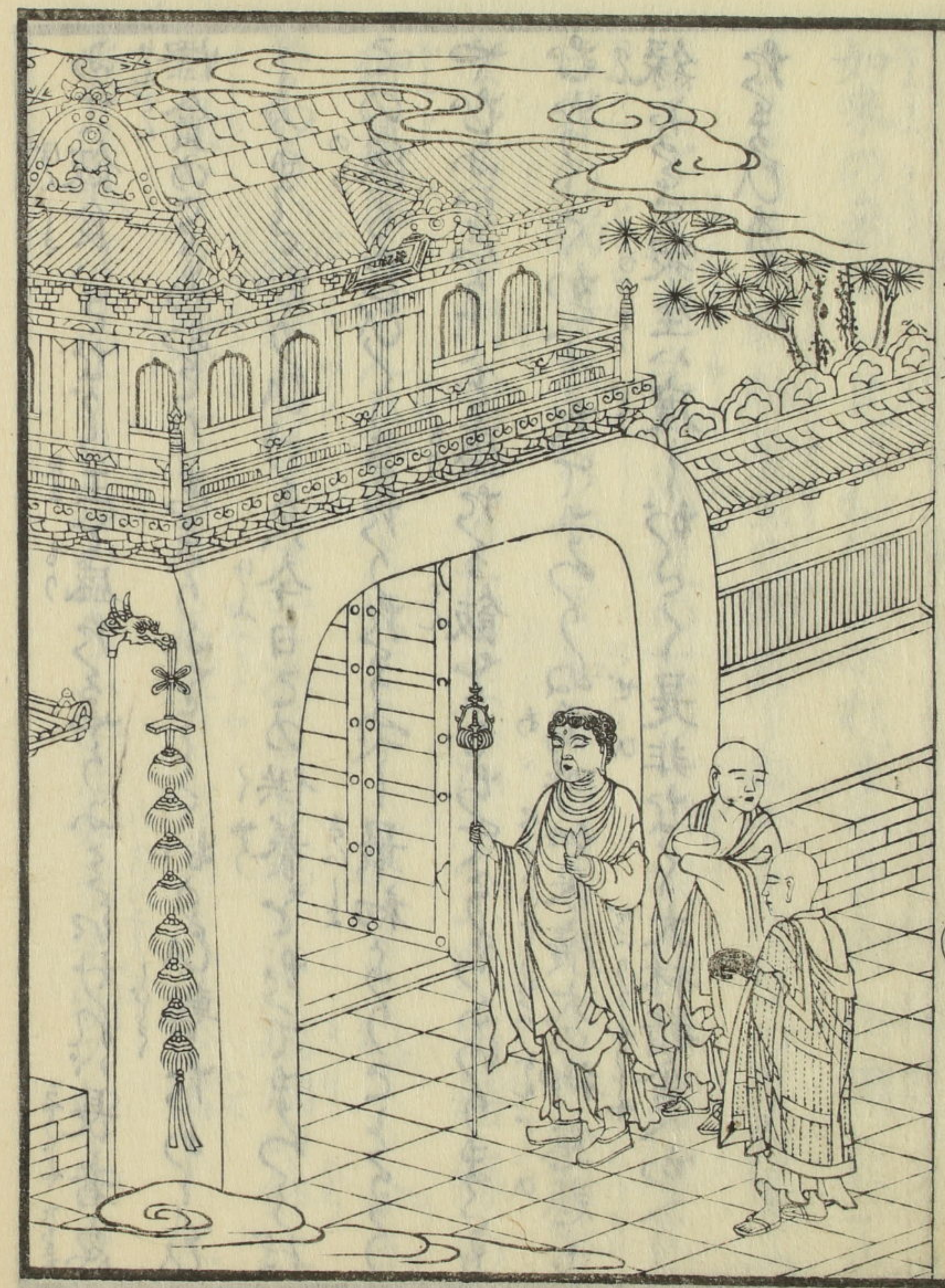
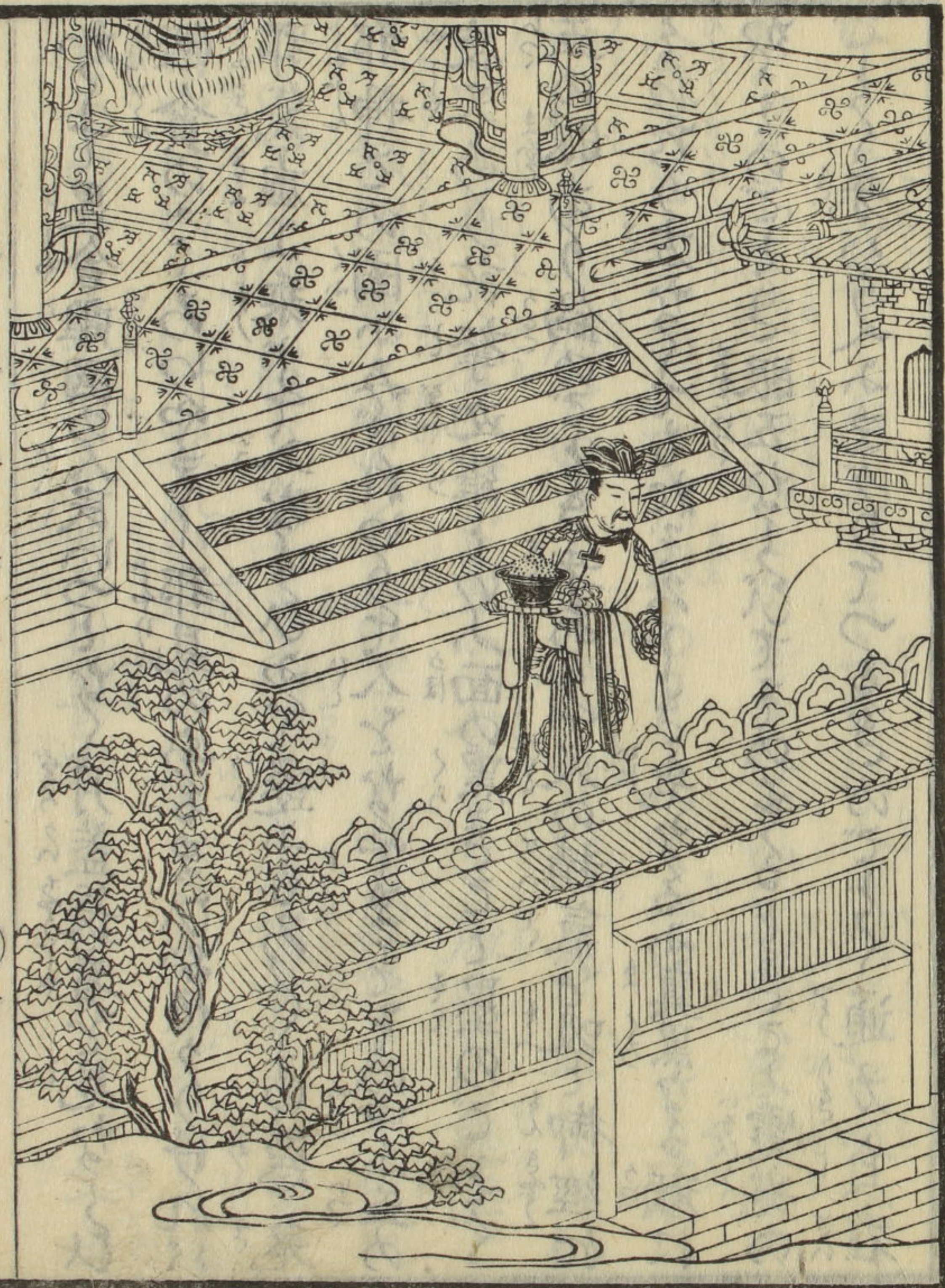
天竺の如來

かひいけれどもまゝつゞくとかひいさるふ今いまこの尊者そんじやと
供養くやうせむとてつゞきたまひ二人ふたりの御弟子かんでとぞうと
たまたまらん所詮しよせんいづれふも供養くやうせむるふいさうとてこれ亦また
そのまゝとまうとてかくしたてまつる如來にやうらいなほくあられ敗あやそ
たまたまいさるバ我われらうとてゆゑて教化けうけせむとて阿難あなん
羅睺羅らごらと左右さうりやうふめつれ菩薩ぼさつ羅漢らくかんハ圍繞かぬうせむれ大
光明くわうみゆうとてなほとて長者ちやうだやの門かどかゝりたまひ青蓮しやうれんの御眸かみまなこ
に慈悲じひの相さうとあゝい頻伽びんがの御唇かみくちびるふ妙たへんなる御聲かみこゑと
あげ長者ちやうだやとこととびたまひいければさゝも月蓋げつがいも

えびふち
天竺の國風にて
行々に熟食と
なてまつる

如来の來臨を見ておほきふれどもき御俗體にて
まゝとて轉輪聖王の御くゝおふもそなりたまふ
べきと一切衆生御濟度のためふ出家とていはい
三界の獨尊たるたゞとて如来めてまゝとて勿躰
なくもこが門みさたりたまふいひとく衆生結縁の
御慈悲なりん是までいほどこゝをなされども今日
をかりハ御供養まつとてあるべきやとて瑠璃の鉢に
白粲なる飯食をとりて長者づうづもち出しに
常とてうろいも鉢なるふいま如来光明のかやき

みて飯食いとなぐ王を盛たるやうふにけれハ長者忽
慳貪のころおとりおさるふをいかに暫ため
いぐまゝおひけるハ今日この供養をたてまつるば
この後もたびくおさるたまふべし最初よりことごと
やむふいおとじと盛たる飯をもちてうろふりまゝも
むかしくかくたてまつるぬ嗚呼如来廣大の御慈悲も
縁なる衆生ハ度いがとて是非なく大林精舎へかへり
たまひき



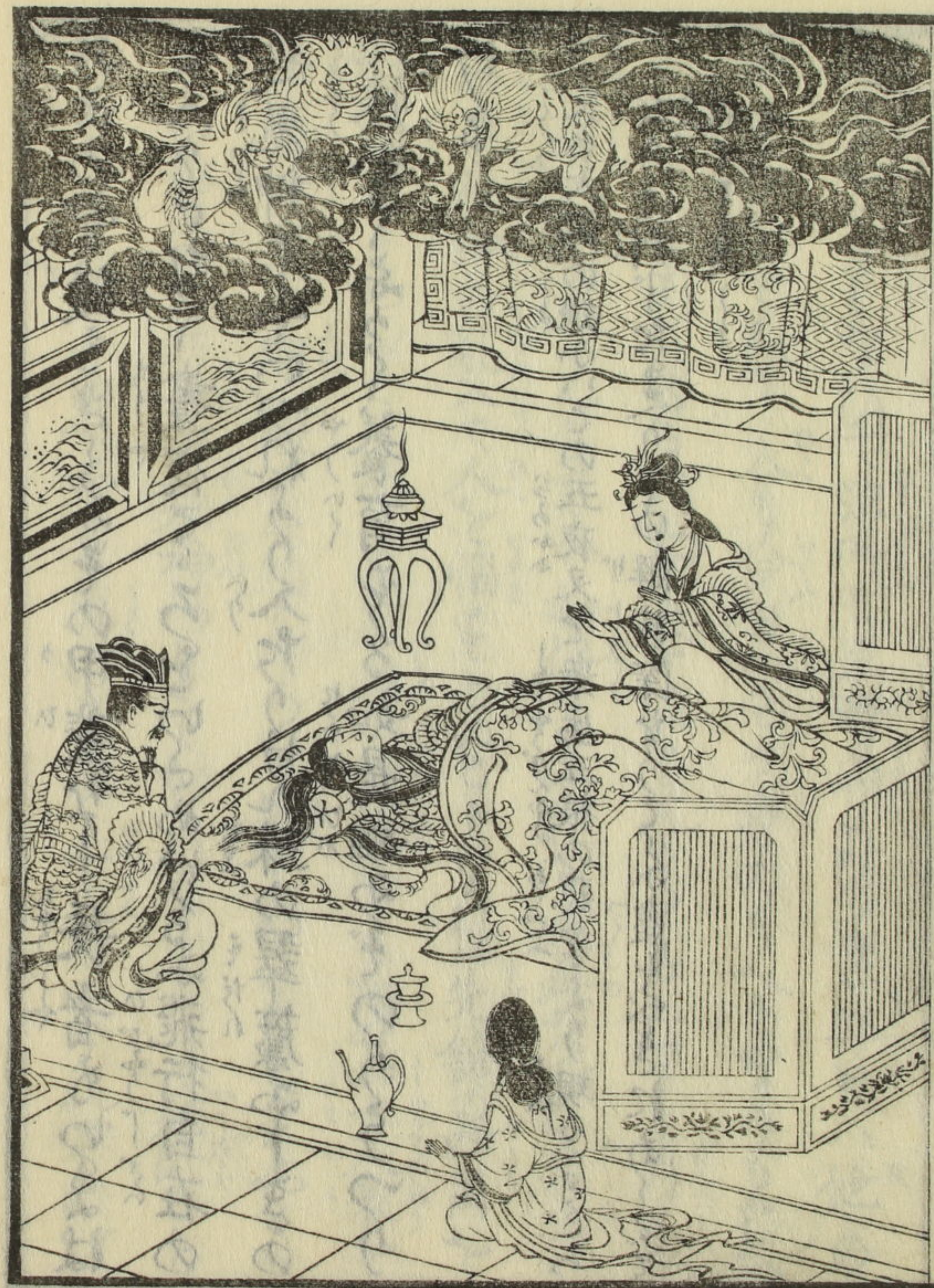
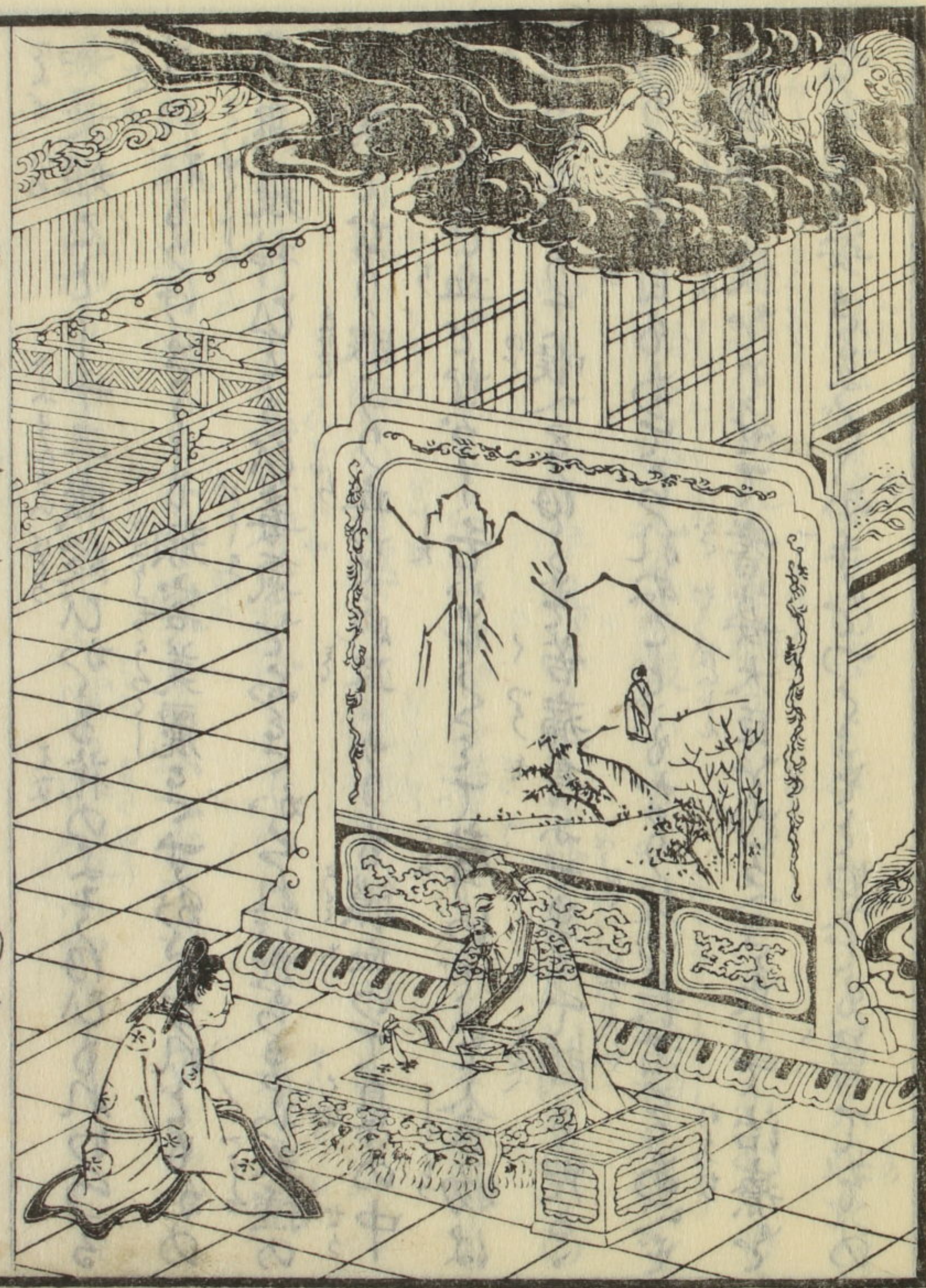
かくて毘舍離國の人民いつとなく月蓋長者を見たりと
慳貪のころりやまゝ邪見のふるまひおほりければ
邪氣虚ふ乗じて入るひめて遂ふもろくの惡鬼
邪神この國のみざれりて人をなやまそその中五の
夜叉あり訖拏迦羅といふ面の黒きこと墨のごとく
五の眼あり鉤のごとも牙ありて人の精氣を吸と御經に
そはたり左なりてもれそろく鬼なるふ真黒なる顔に
かゞそのごとく眼五なりびてそのまゝとこと電光の
ごとく牙はうへふまがりてつるまゝのごとく通力自在

にして虚空をとびありと一たび人の精氣を吸へば
たちまち五種の温病となるこれとかの御經に毘舍離の
人民大惡病ふあり一ふ眼ありて血のごとく二ふは
兩の耳より膿をいづる三ふ鼻の中より血なぐれ
四ふ舌嚥て聲いでも五ふ食する處のもの麁澁と
化六識閉塞て醉たる人のごとくと説たまへり然に
このやまひは罹りたるもの一人も本復することなく
國中一同の流行なれば病ものゝ家ふもつ死する人は
巷ふあふる或は子ふこられ妻ふもなれまゝハ父母

兄弟と申しなひて泣叫て惡野山よりびぎき昨日ハ他の
やまひをさひい人も今日ハ身みのうへとなりもだく
くるむありさまたていていんるもなり月蓋
長者このうもさうておほさふれこれ此たびの疫病ハ
惡鬼疫神の亂入て人を惱さむとのことなれば先館の四周を
警固せしめよとてあまたの兵ふ劔鋒をもたせ四方八表を
十重廿重ふ守護させてるを安じぬりしとやも
その警固の兵ふ疫神つとてかこそより病卧こと
さなぐ風ふのふと草のごとく一人ものぐれれば

兵士の守護もさふその甲斐なり長者もいまは
せんるさく晝夜をろといめけるふ飛行自在の
惡鬼神とやいづれより入たりけん珠の翠簾よりさの
几帳かくふく養育する如是姫あぞのりうつり
ける

天台大師の疏いこの五夜又と衆生五根の惡業より現るゝそそ
なりと判じたまひその解甚深なりてふ盡さべきにあつて
就てゐるべし



如是姫こと十三歳綻びかゝる花のよろひもれりづる
月のねもろげさしも顔容美麗とすがなれどもかの
惡鬼疫神ひとび毒氣をふまかれはちまた五種の
温病となり眼より血なれ耳よりも膿血にて鼻の中
より黒き血をながし舌はもろて聲いでも食物は
麤澁となりて喉へさへ苦痛身おせまりて悶えたる
ありさへ目もあてられぬこともなり父の長者よりあへ
王舎城へ使をよせて耆婆大臣をむかへたりて治療を
とふ耆婆さまぐみ手をつくともいへども曾てその

ある一なり遂に耆婆もあぐもてさうけり此たび
流行する疫病いづれも身腑より出たるやまひあへど
そのさなもと慳貪邪見の業報ふより惡鬼邪神の便を
得てせめやまもことなれいなる妙藥良劑もその
あるあるべうもさすづの耆婆もあつぞきける
請觀音經に良醫の耆婆その道術をつくせどもさうこと
あつむとて月蓋長者のなげさしこれなり夫人の親の
ころ醜も愚かるも子を愛するふへてなりさうこと
女子はさのかちうるはさ心も亦優ふやさしければ

父母のなげきもさもありなんとてふ如是姫のふり
けふおとろへ朝より夕に弱りたのむとくすなりゆけ
眷屬の長者よりくひまりしける姫君のやまひこれまで
種くふところをつくへたまでも醫藥も神力もさうその
功なりこのうへ手を拱てむなく終とせん外あるべし
幸ふしよこの國の大林精舎ふまゝまゝ大聖世尊釋迦
牟尼如来は一切衆生の苦患となくひたまふよりうねて
うけたまひぬいそぎ大林精舎ふまうでなげきまうとせ
たまふべしとてめければ月蓋とてかゝることもなく默然と

默然と
だまのいふ

釋迦牟尼
大聖世尊

とてぬきうぐそやその間ふも姫のやうだいハ稍おとろへ
いまあやうくもければ五百の長者も一同ハ月蓋といそめ
すめていそぎ大林精舎へまわりたまひそや釋迦如来へ
ねぐいたまへと聲こふまうしければその時月蓋長者なだを
なきてまうしけるハそれバそのことハ我もとくよりおもハ
ざるふいあゝねどもすきこころ釋迦如来の来たまひ
時一鉢の供養をもなごも無下ふかへ奉るのそなへ
これまで大林精舎へひとびともうづたることハな
とろふ今日女子のやまひいふハ太切かゝひたればとて

觀无量壽經
佛心と大慈悲
これなり

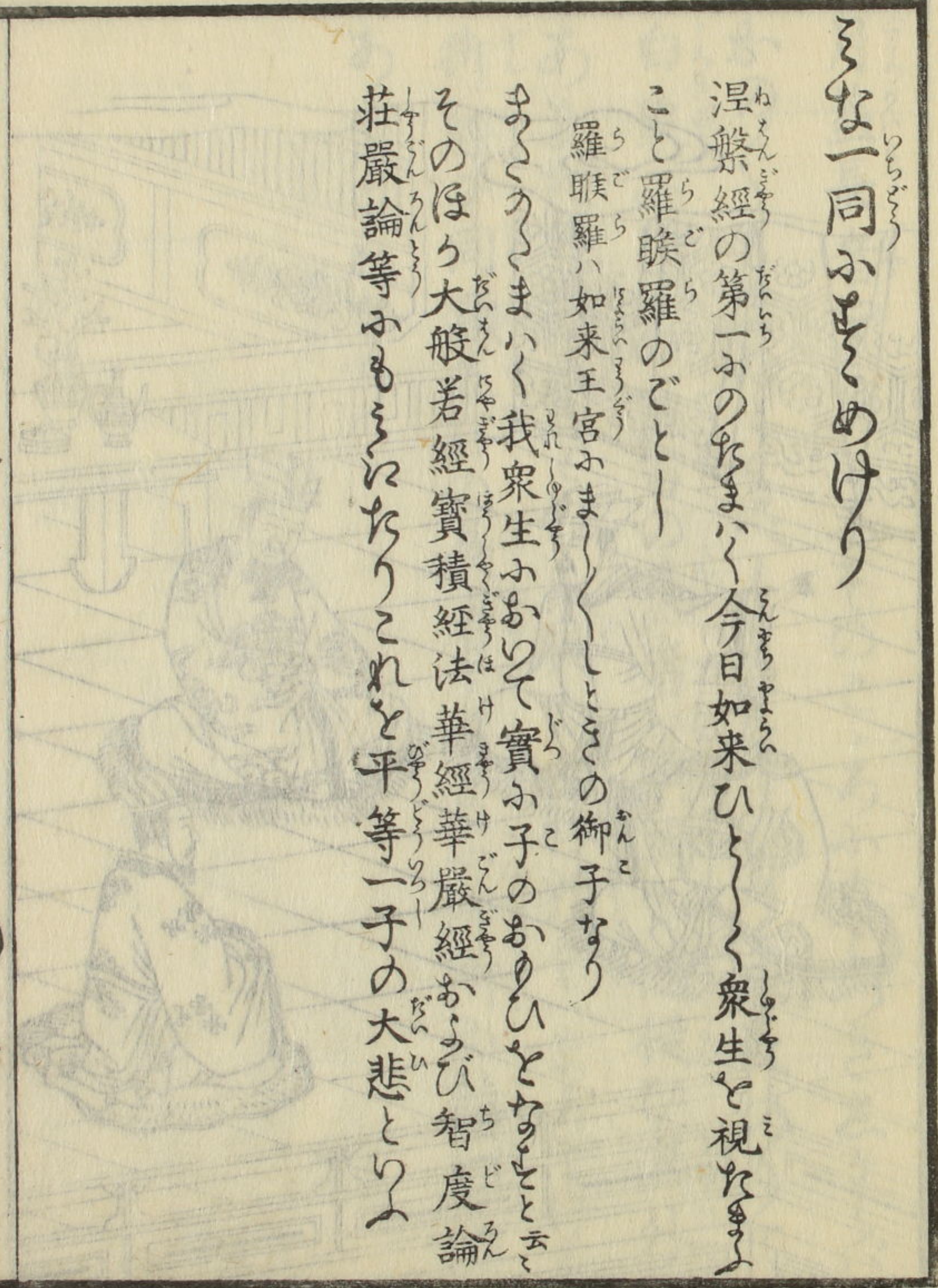
いま何の面目ありて如来とぞめ御弟子も顔と
ありせまうもやと後悔のなむむせびける眷属の
長者これとぞて何事とぞもや人間にこそ
うらふむといふこともあれはけいもとぞ慈悲と
ころとまたまゆゑなほ何ほどつれなりあり
たてまつるとも反てその人をあられたまひ罪あるも
罪なをも一子のごとくおぼめさるうけたまはり
つゝたればそれまでの罪障を懺悔とて唯ひなまふ
ぬぐいたまひなばなほ佛のえとてたまふべしと

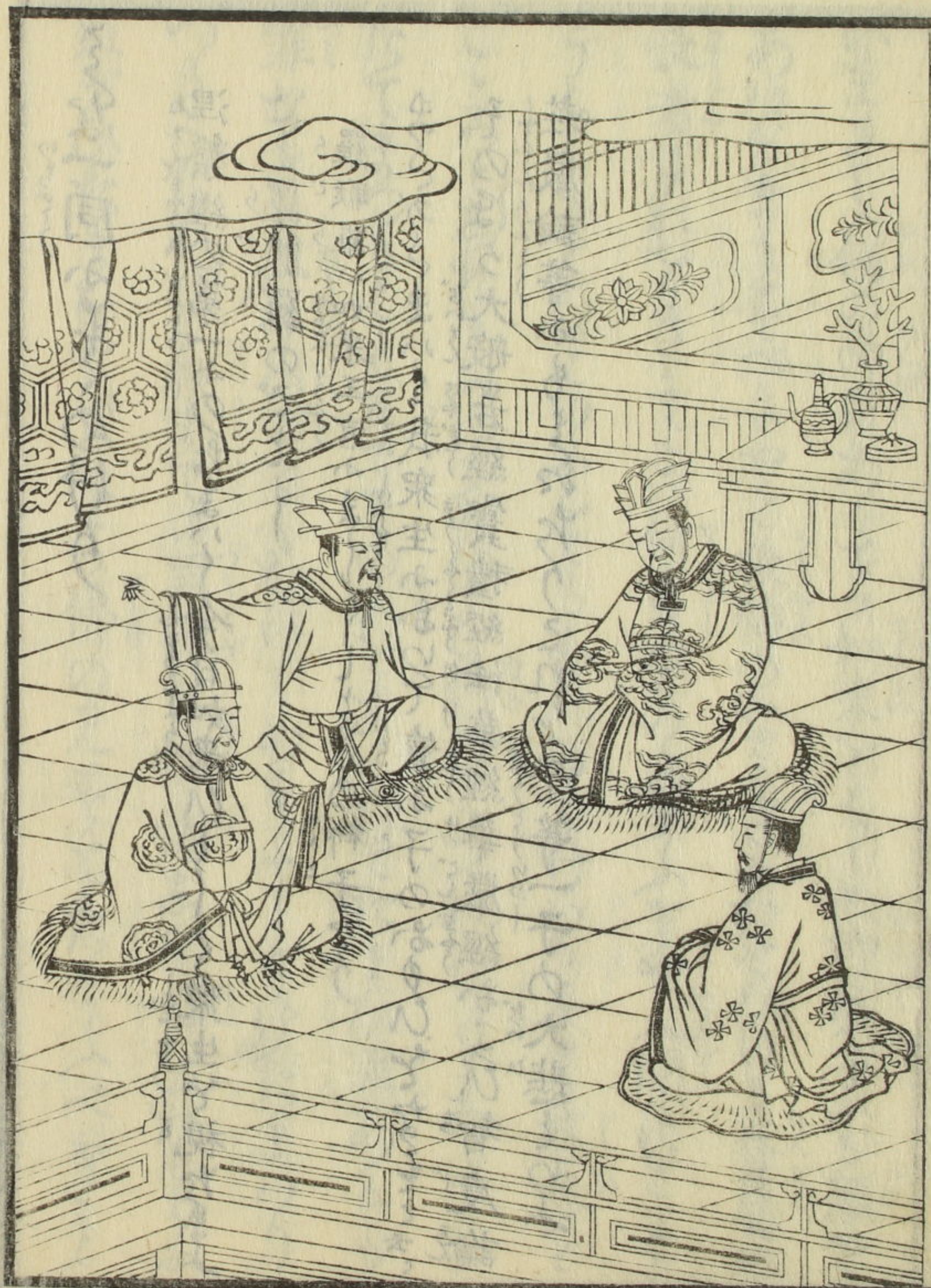
なな一同おぼめけり

涅槃經の第一のたまひ今日如来ひと衆生を視たまふ
こと羅睺羅のごとく

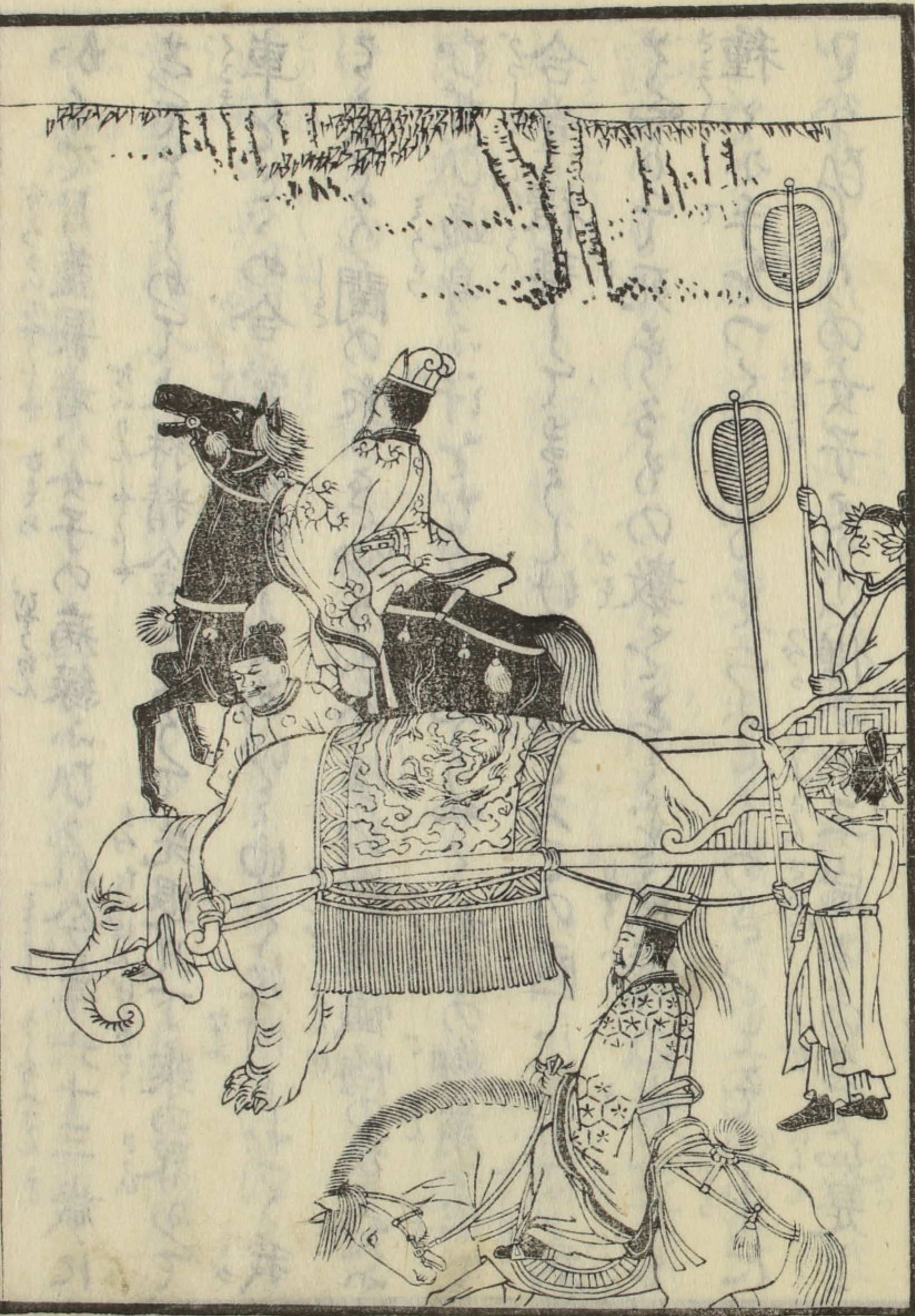
羅睺羅ハ如来王宮の御子なり

あつてまい我衆生ふかいて實の子のおひとやると云
そのほろ大般若經寶積經法華經華嚴經あまび智度論
莊嚴論等おもひたりこれと平等一子の大悲といふ





月蓋長者げつがいちやうぢややうくふそのころふめぐりききりくバ
かのくもまぬくるべしとてその身ハ車くるまにのりて
白象しろぞうふひくせ五百の長者ハ騎馬うまのりて隨後ついでひ其外
あまたの眷屬けんぞくとめ一具ぐし大林精舎だいりんしやうじやへまうでける
御經おんきやうふ同類どうるい五百の長者ちやうぢやとともふ佛所ほとけのころふ詣まうでつと
あるハこれなり

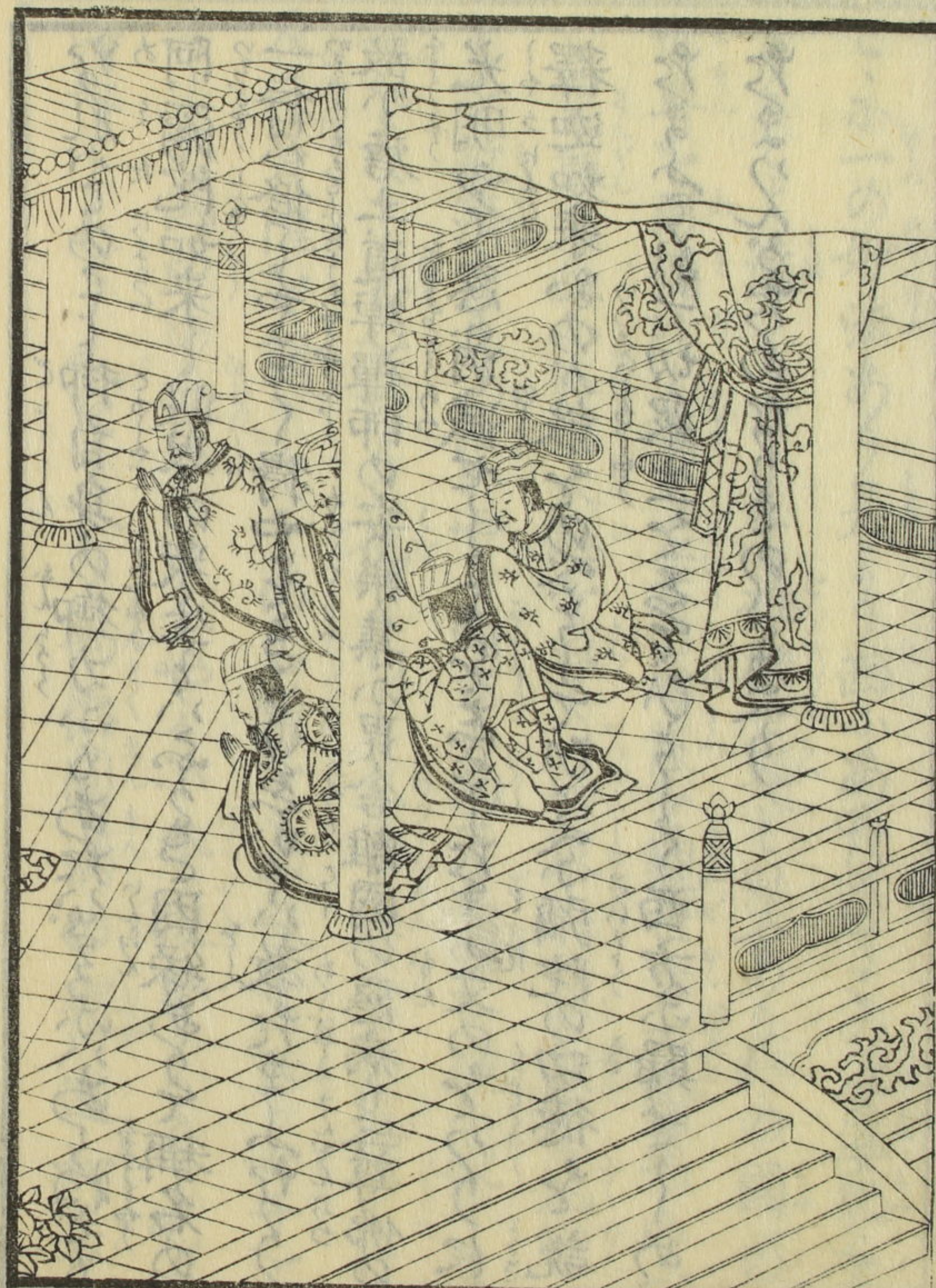
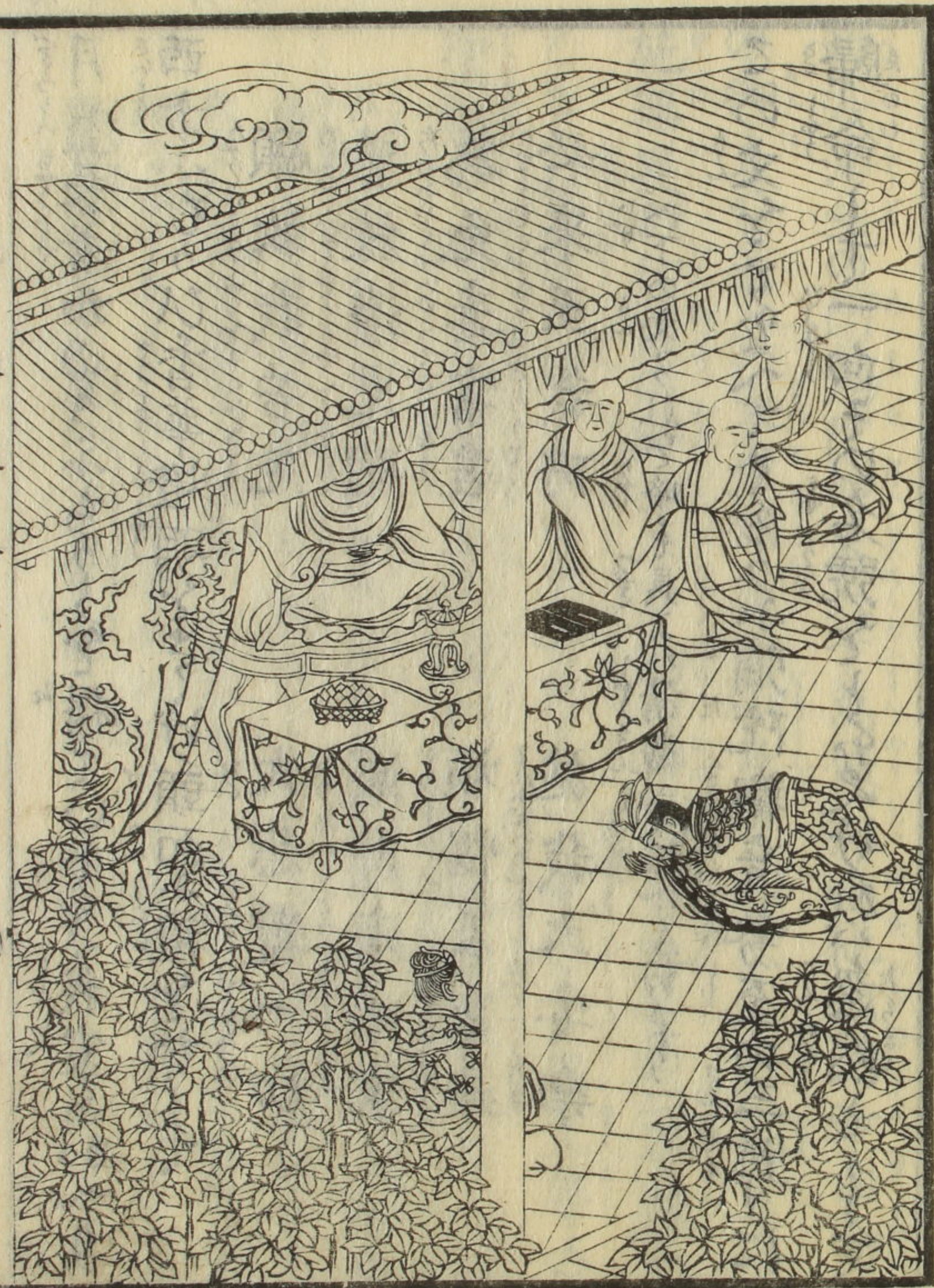


かくて月蓋長者ハ女子の病縁ふひうれ今年六十三歳に
あてそめて大林精舎にまゐりて先退凡下乗の界めて
車とぞめ合掌恭敬してあゆみゆくは何となく我
ころより闇のたうさやうふかばに慚愧懺悔のかゝるだふ
むせび遍身ハ汗をながしてやうやく如来の御前ハ出て
合掌禮拜してまうしけるハ此ころこの國に大惡病
とやりて死するもの數とぞと良醫の耆婆も
種々ふ手をつくせどもとふことあるとぞその中に
こがひりの女子とハ僅ハ十三歳その名と如是と

いふものこれまゝ此たびの天行病とかりて命は
さなぐ風の前ゆふべのそのび草の上のあゝたの
露よりもなる危くとい侍るあられねがひハ
如来平等の御慈悲を以て女子とぞめ國中ハ
民の病苦とぞといせたまふとわくねがひ奉り
けりそのとぞ釋迦如来長者ふつげてのこまハく
此般の疫病ハ惱みともものハ前のせうけけする
業報われ今とぞ死するものと活ハ病ものと
平愈せしむることつづカともあひがたされども

こゝの一の妙法あり是より西ふあつてこの娑婆界を
さるること遠くとして極樂世界といふありかの國の
世尊と阿彌陀と稱し左右の菩薩と觀世音大勢至といふ
この三尊つねに大慈大悲を以て一切衆生の苦患と厄難
とを救済たまふ汝とやく西方に向て五體と地を投じて
禮となり香と花とちりし一心專念に彼はとけ
及二菩薩を請してその名號をよめかば汝が女子を
とめ國中の人民もよめやうふ本復さるることを得
得べしととくへたまへり萬德圓滿の釋迦如來

なればこのこと御自身の御力にもあたるふあつても
阿彌陀如來と此界の衆生といふも因縁ありて稱名の
一行に修しやよく得たまふゆゑかく教たまふなり
故に唐土道綽禪師の安樂集に毘舍離國の惡病も三尊佛の
光明にて忽消滅せしことをよめたまふ文のとりに
釋迦如來かの能をのぞいてひとふ彌陀の功德を説
たまふこれ一切衆生をよめてひとり西方に歸せしめ
たまふんがためなりとのいふなり



月蓋長者おほきふちうと得ていそご我家ふかへり
西方ふむひ香華燈明とさげ頭面ふ禮をうて

願救我苦厄

普放淨光明

為免毒害苦

必来至我所

以下の文これと略も具ふハ請觀音經いふなり

大悲覆一切

滅除瘕暗冥

煩惱及衆病

施我大安樂

この文をとらへてさうふ彌陀觀音勢至の三尊に
歸命して一向その名號をとらへければ忽然として

西方淨土の阿彌陀如來六十萬億那由他恆河沙由旬
の御身とちめ末世相應の小身とあふ右の御手ハ
施無畏の印左の御手ハ刀劔の印觀音勢至の二菩薩ハ
てもふ梵筐の印とむとせたまひ一光のうちふ三尊の
聖容と現じ月蓋長者の樓門ふ來臨まうまうと

私ふり刀劔施無畏の御印相ハ拔苦與樂の表示なれば左ハ不動の
劔印あて惡鬼を驅り右ハ無畏とあて諸人と安樂あしめ
たすひ觀音勢至の梵筐ハ大般若二十萬頌と納て惡魔降伏の
相と示したまふなり故ふ古來相つてて般若梵筐の印といへり
類聚國史ハ廣仁天皇寶龜五年の勅詔をのせて般若波羅

梵本二十萬頌
譯六百萬卷と
類聚國史三百卷
管承相天満宮の

撰て今六十一巻
を存するもの
○續日本紀にも
廢帝の勅をの
らる大言これか
○諸史 光仁か
作る類聚國史
廣仁いつる

密多ハ諸佛の母なり 天子念むるときハ兵革災害國中ハ入らざ
庶人念むるときハ疾疫癘鬼家内ハ入らざ乃至常ハ念誦せば
國ハ疾疫の災ナク人天年ハ壽をたもちんと宣ひても正しく
この二菩薩の御印相ハ合へりされども實を越してこれをいそ
刀劔の印を以てハ煩惱の苦因とさる施無畏の印を以てハ菩提の
妙果をあへちまふなり密教ハ決定往生の印といへるも即ち
梵篋なれば甚深の義あるべし

爰ハ本師の阿彌陀如來ハ大光明を放て毘舍離城の二國を
てしなまへ山河大地草木瓦礫も悉く金色と變じて照
かざされば國中ハ充滿たる惡鬼疫神いうてハ匿るゝに

賢劫千佛經にも
一このほけ因地
たつとこ柳と
水と世尊ハ供へ
たまふことなり

處あへんも光あててされて其姿あつれ通力を失ひ
ちりちりハ逃去けりこふかいて毘舍離國の人民現たり
佛の光明を拜しこれもハ長者の館ハ集り來り楊の
いづと淨き水とを觀世音菩薩ハさげたてまつるそのとき
觀世音菩薩本師如來の威神力をうけて大神呪と説たまふに
不思議なるな萬死一生の如是姫とてハ國中の人民もこのな
立地ハ全快とけりこれと御經ハ毘舍離人平復如本とせざ
たもへり善導大師の往生禮讚ハ光舒て毘舍を救ふと
あるもこのことなり

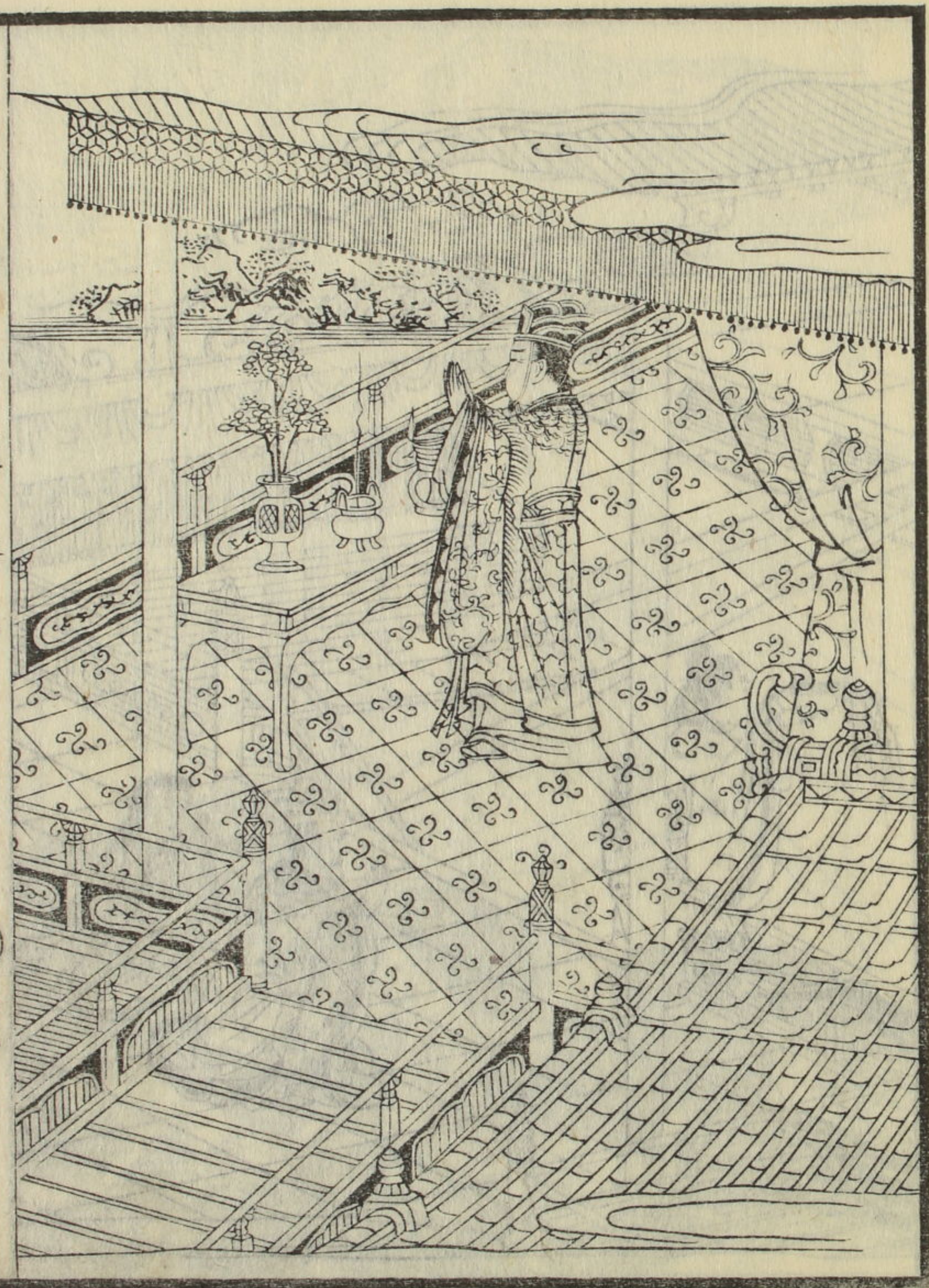
一の事、
賢味千歳

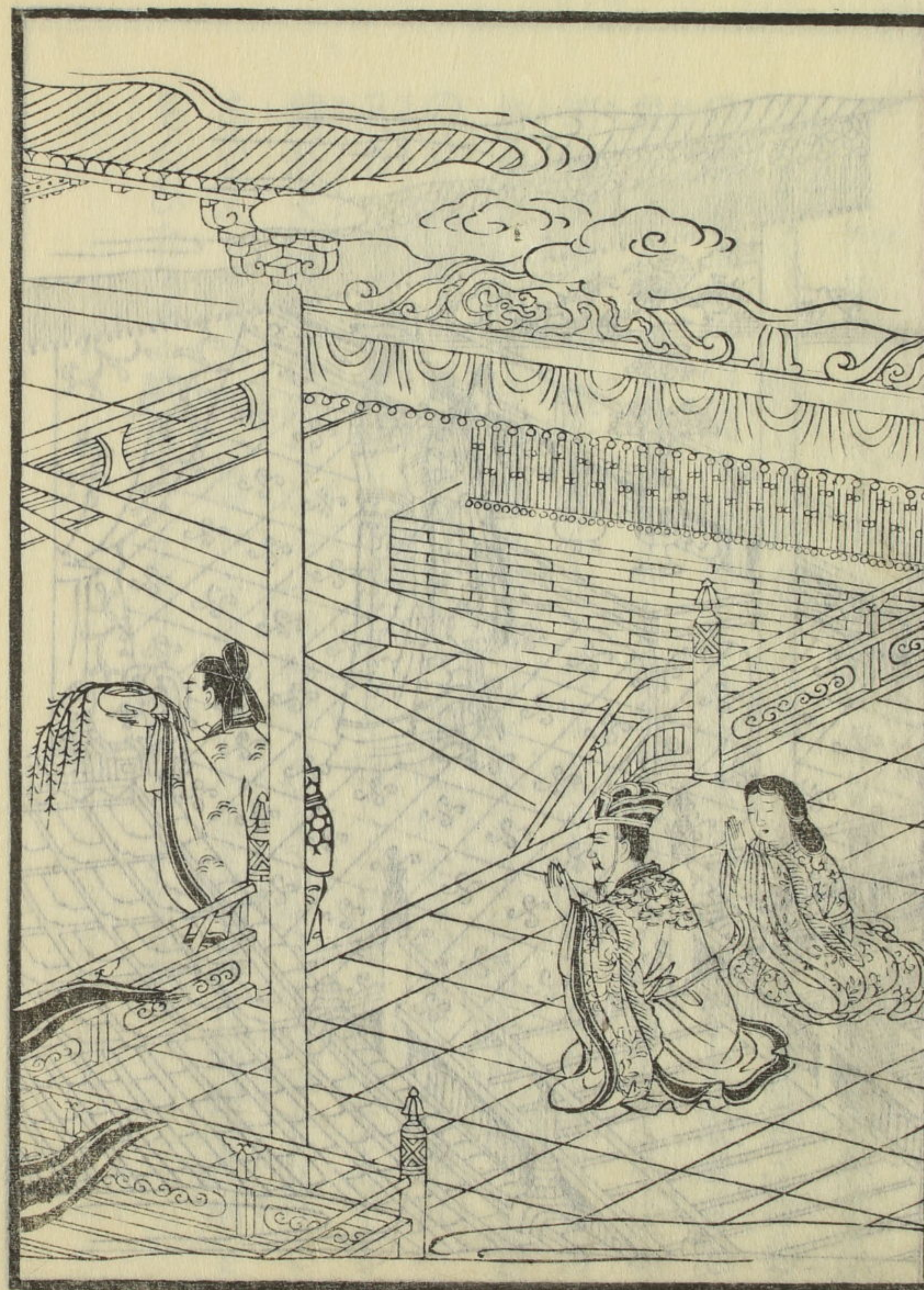
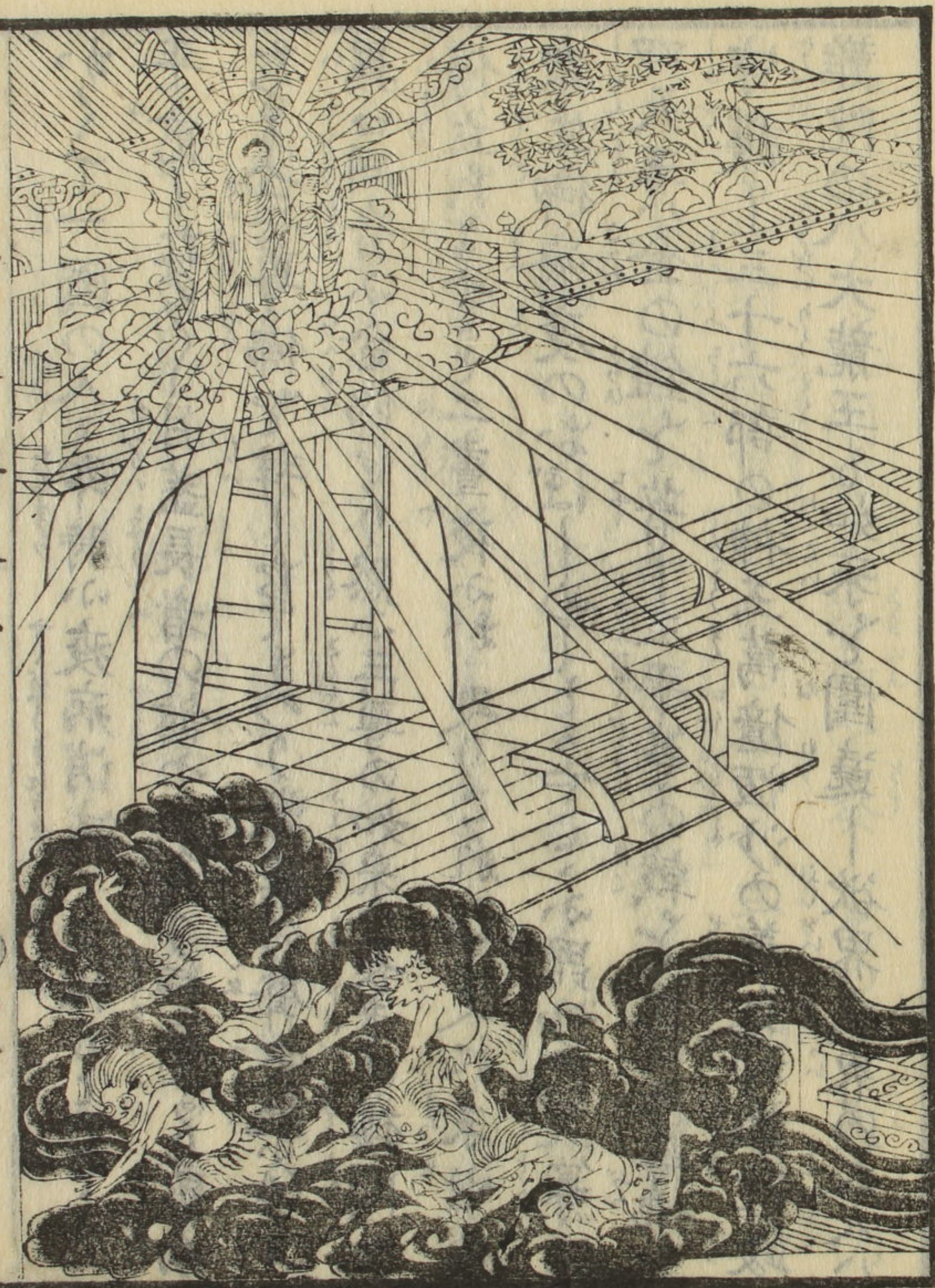
一の事、
賢味千歳

妙みよ觀くわん察さつ智ちハ五ご
佛ぶつののうちうち彌み陀たのの
御ご德とくなり

口
來
傳
卷
二

ごとく阿彌陀如來も佛法小因縁うもて人を濟度たまふ
ふい先とめ觀音の利益より導きたまふなり理趣釋小淨妙
の佛國土小阿彌陀とありれ雜染五濁の世界小觀世音と
現とあるもこの意なりかるゆゑ小觀音の利益とあけて後小
阿彌陀佛の利益とあめて大悲深重の方便なるべし既にこの
經小爾時觀世音菩薩佛の神力と承て消伏毒害陀羅尼と説
のこまいたれば觀音の利益即阿彌陀如來の利益なり情以バ
天台大師の楊枝淨水の法をもつて諸人の厄難を救ひたまひも
傳教大師のこの經と叡山の相輪檜小とあて王城のまもりと
あてまゐるもその源ハ當初三尊佛の大悲光明毘舍離國の疫病と
もくひたまふ職由とこころなり實ふよある哉





かくて一國の人々即時に疫病消滅て六根もこのごとく
平愈したるく月蓋長者の館ふさたり極樂より影向
たも三尊佛を拜したるなり歡喜の聲天地ひびき
異口同音ふ念佛なり然ふ三尊の如來へ長者の樓門に
停立たもふこと二晝夜ふあまりこれひとに末世の
衆生御濟度のおぼしめしとやこふ毘沙門天等の
四天王ハ金の鎧と著し三平等の戟と仗て三尊佛と
守護し三十六部の神王萬億恆沙の善鬼神難陀跋
難陀の八大龍王も如來と圍遶し欲界色界の天人ハ

花とあらし乾闥婆王管絃と奏しそのほろ天地の
神祇も一時ふ來會てふことく三尊佛を供養
とたもふ月蓋長者ハかく諸天善神の禮拜恭敬し
たもふを見ていふ信心とまかりたるとき如來の
このたびふさり極樂へかへらせたまふのころかほさ
ことおろせめて尊容とうつしとりて永くこの土に
とめたるものと思ひふたび大林精舎に
まうてこのむねを釋迦如來へ願ひたてまつける

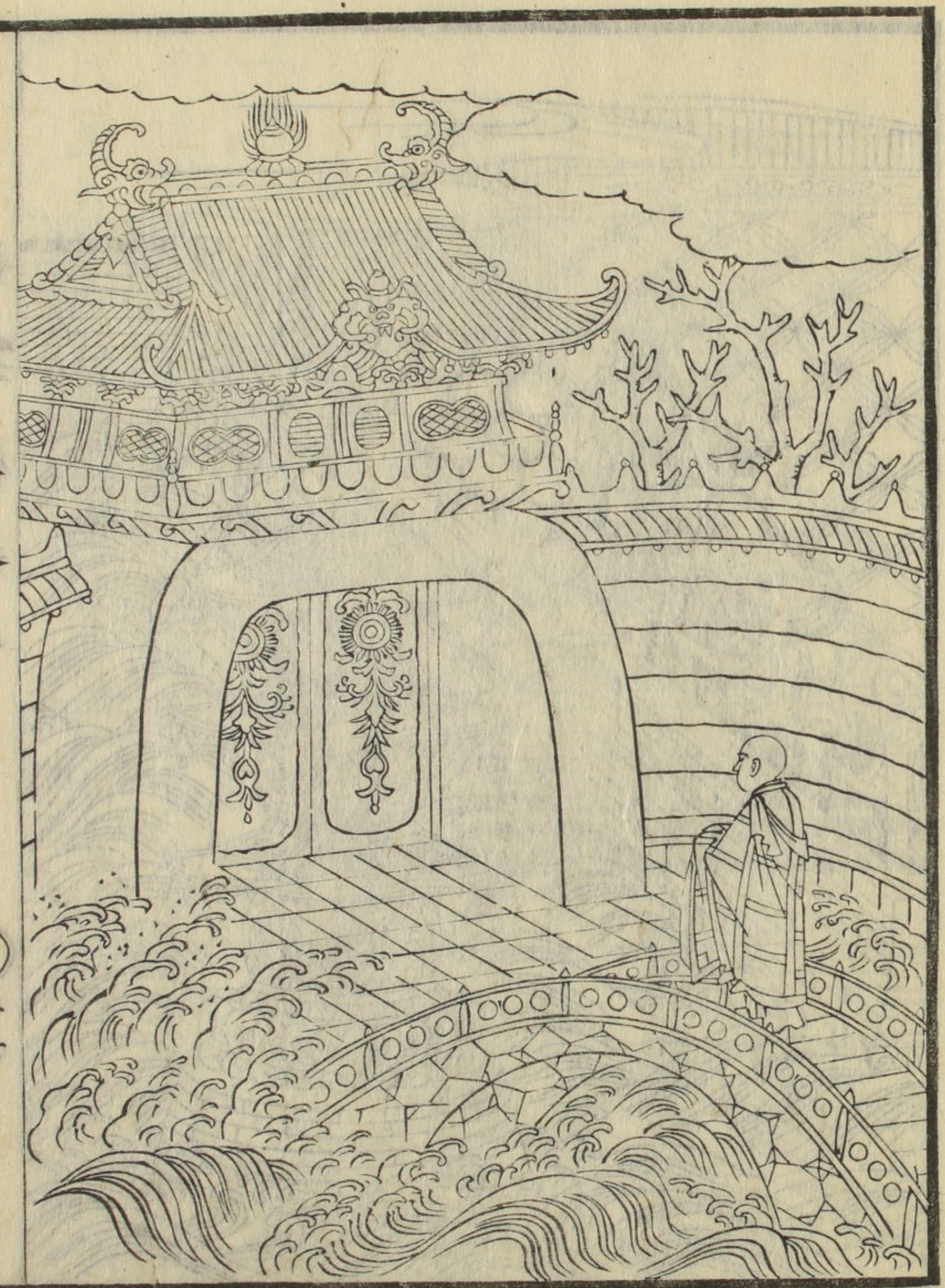


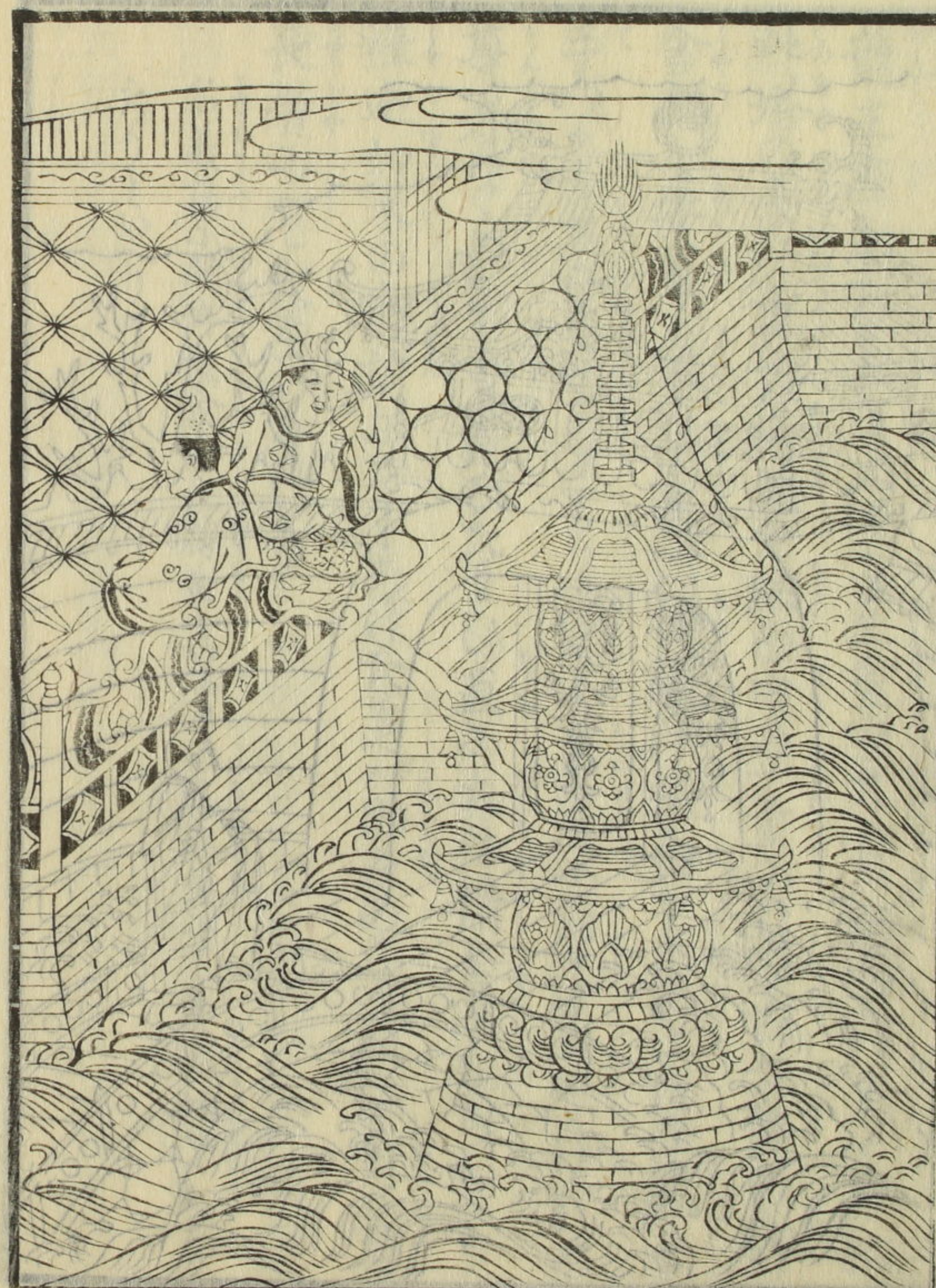
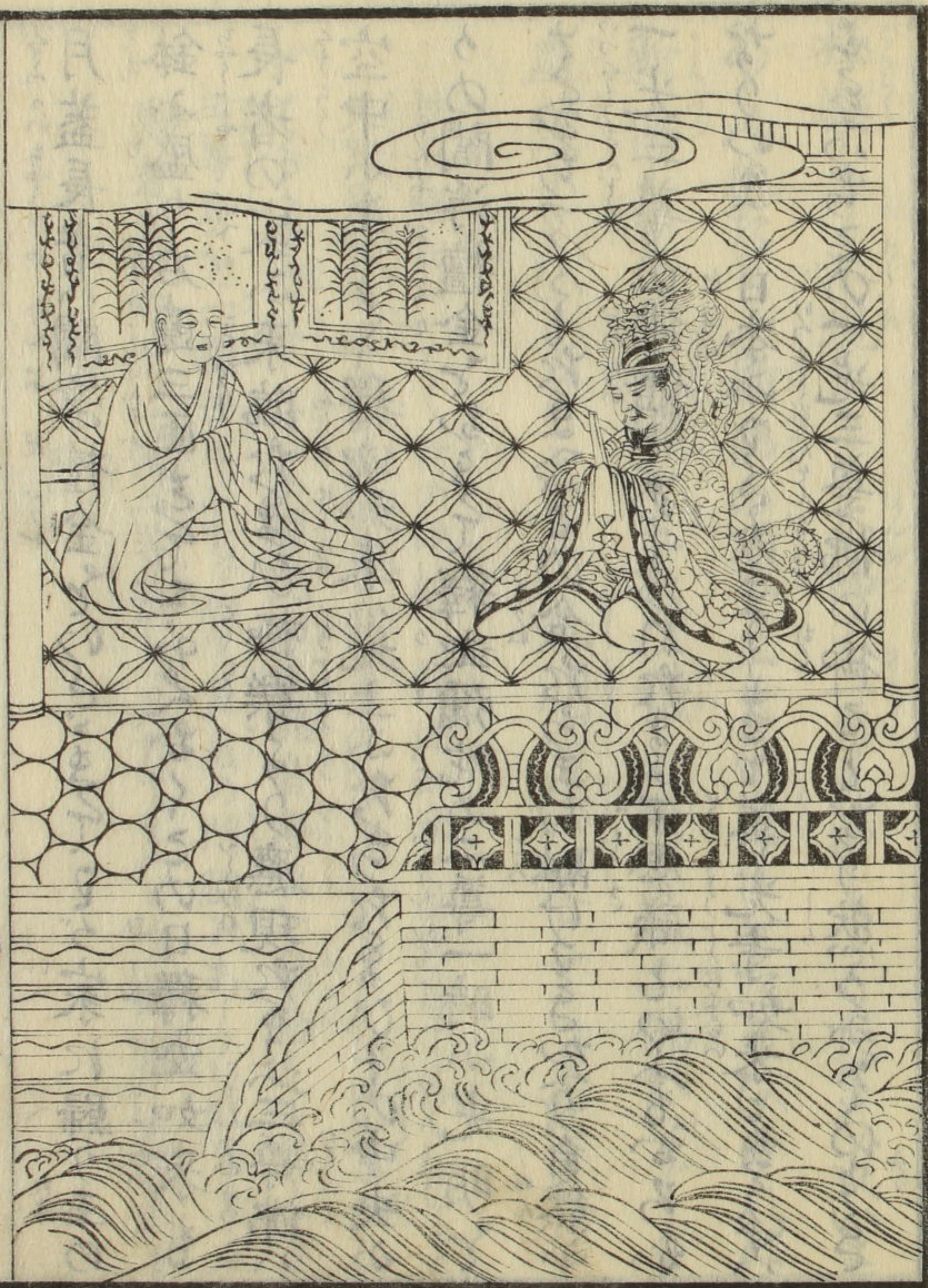
須弥山の南畔の
吠瑠璃樹あり
横七千由旬あり
その樹の下に
閻浮檀金出生す
樹より
起世經取註

釋迦如來此むねとまきしめし善哉と汝がねぐみところ
となりて殊勝なりとまきし閻浮檀金ともちて鑄うつと
べしとあふせありける此時長者まきしける閻浮檀金は
閻浮提第一の寶めて人間界ふいたし國王長者たりとも
この金あることなりといはせんとまきしければ釋尊即
目連尊者とめして汝龍宮にいり閻浮檀金を乞ひ得て
くるべしとあふせありけるこの目連尊者といへばあまたの
御弟子の中ふも神通第一の名を得たる阿羅漢なれば
たちまち鷹隼の飛ぐごとく龍宮城にいり娑伽羅

大龍王に謁して佛勅のおもむきをのぐたまひければ
龍王こたへてまきしける龍宮城は海底にありて
稼穡耘耕の勞を用ひざる所須なるのごとく満足
するといひて閻浮檀金の徳ふりてなりかるがゆゑふ
この金と第一のたかきとして寶塔ふとまきあはくこと
なれば毫釐も外へちかき侍れども釋迦牟尼如來
のあふせといひるは極樂より來現すまは三尊佛を
鑄うつたまふことなればこれまた多生曠劫ふも二度
なりと勝縁なりとまきし供養したるんとて娑伽羅

龍王座をたてて三重の大寶塔をひくくに
此塔の上の一重の御經を納め中の一重の過古七佛の御
舍利を安置し下の二重の彼閻浮檀金を入りたり龍王
手づく其金若干とていづれ尊者ふたてまつりければ
尊者なめめと歡びたまひ直に大林精舎ふもちかへり
釋迦如來の御前ふとあげたまへば即そのころぬと月蓋
長者ふとたまひける
名義集小閻浮檀金こに勝金といふその色赤黄ふして紫焰をいひ
たりといへり





月蓋長者ハ閻浮檀金をいごまてて我が家に歸り玉の
鉢ふ盛り右邊三匝をてそかくこの日釋迦如來も
長者の家ふ來臨たまひ極樂より應現たまふ三尊佛ハ
空中ふましく釋迦如來ハ地上ふたたまひその中央ふ
りの閻浮檀金をまてて釋迦彌陀の二尊一時ハ光明と
てもあつてつしたまへこの金たちまち融けつきかり自然ハ
一光三尊の佛體とあられたまふ不思議といふもあらか
かりいま日本ふつよりましまと善光寺如來とまうす
とまふこの一光三尊佛の御ことなり然るふそのとき

極樂より來現たまふ本佛の三尊あゆまうたまひ只いま
あられたまふ新佛の頂と三たび摩さたまひければ
新佛もまゝ本佛と三たび禮したまひ二佛おどろく
虚空ふとびあがりともに光明と赫奕とてらしたまへり

扶桑略記ハ寛
治八年の勅撰

一標手半の量
ハ第六の巻ハ

扶桑略記ハいそぐ件の佛像ハ釋迦如來この世ふましく一とて
天竺毘舍離國の月蓋長者釋尊のそとふさく西方向ひ
てらるる小禮拜一心ハ彌陀如來觀音勢至と持念そのとき
三尊身と一標手半ふちめて月蓋の門闥ふあられたまふ
長者まのあら一佛二菩薩と見たてまつて鑄寫したてまつる
てころかりと云





如來傳卷二

斯こゝろて本佛ほんぶつ新佛しんぶつともさへ西方さいほうをさしてとびさうたもう
 長者ちやうぢやもるわふれを見ておほそふ驚おどろそ本佛ほんぶつハ素より
 極樂ごくらくの佛ほとけなればかりたまふも理ことわりなり今うつ一奉る
 新佛しんぶつハながくこの土ど御ごもぐこととめあそ末世まうせの
 衆生しゆじやうとも濟度さいどちたまらんがためなりもうるふ其新佛そのしんぶつも
 西方さいほうへかりたまひなバ折角せつかく御ごもぐこととつ一わひも
 なうとて聲こゑをかざりあそなげさけるその時ときさるうに
 西さいの雲間くもまより新佛しんぶつ告つげてのたまはく我われハ本佛ほんぶつと極樂ごくらくに
 わりたてまつりほどなくかりさるべしと仰あやありて

如來傳卷二 三十一

つひ西のそふりたまひしやぐて新佛はかへり
まじりたまひければ月蓋長者よろこびの涕みむせび
即後園に伽藍をたててこの三尊の靈像を安置し香華
燈明の供養おこなふも身心恭敬奉事し且この長者
つねの心願ふれ生る世に此界に生れあるひ國王大臣と
なりまほし長者居士の身をうけてなぐく如来につらへ
たてまつるとぞちひけるかてその後一千四百年の
星霜を歴て如来もろく虚空を躡て百濟國に移りたまへり
扶桑略記にも月蓋長者遷化の後佛像を騰り百濟

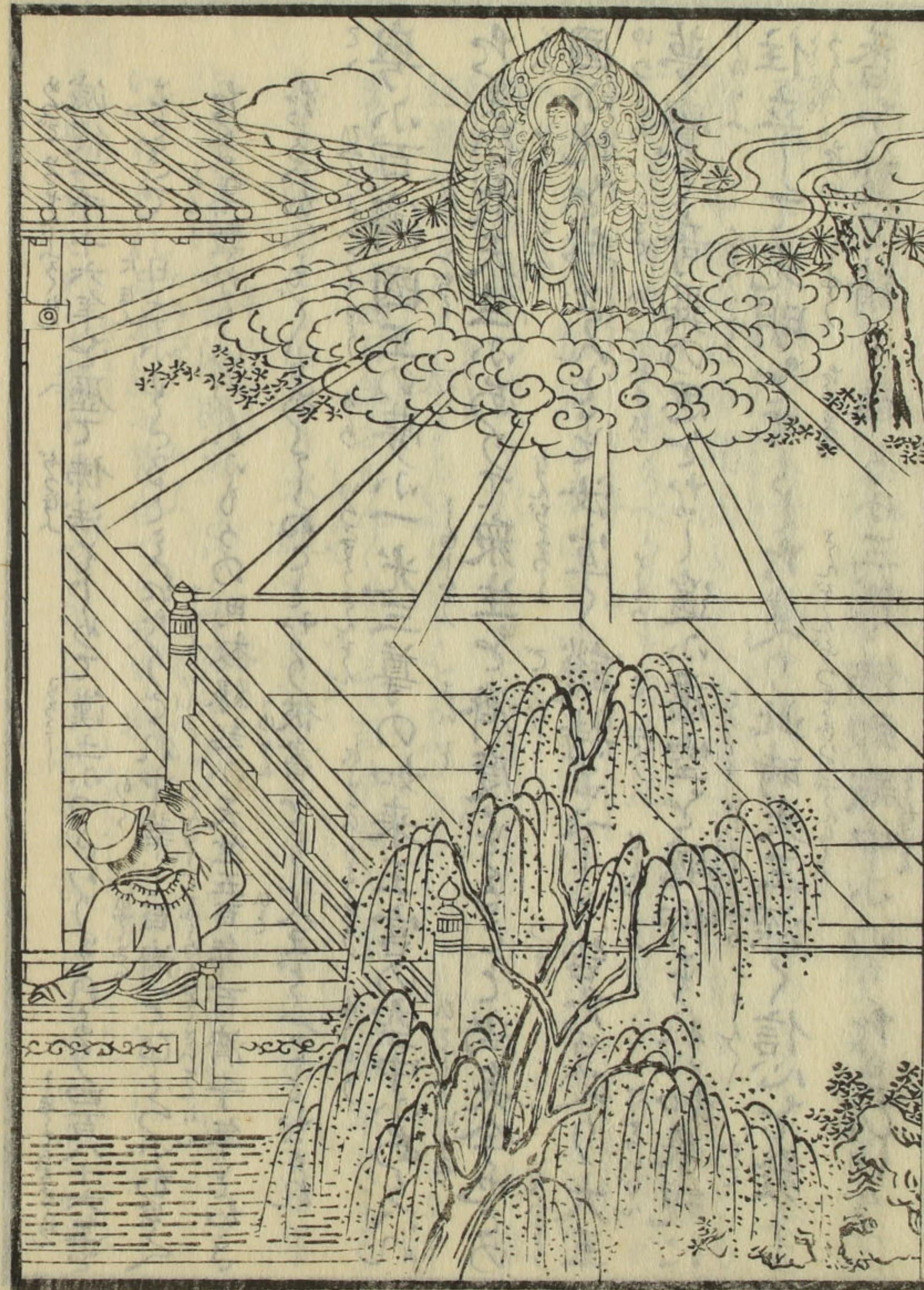
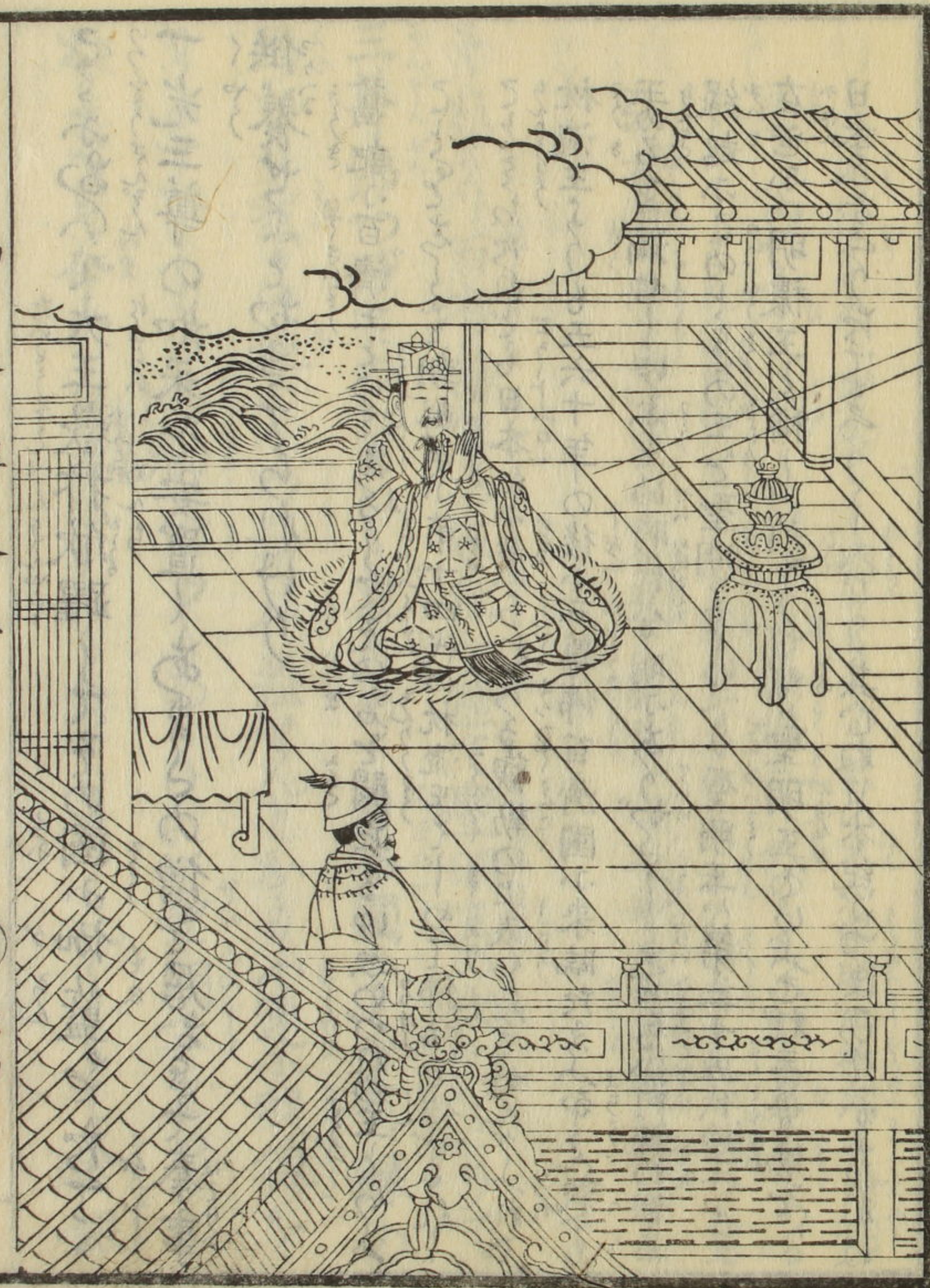
國に飛到ちたまふといへり

百濟國ハ三韓の一にして南ハ新羅に接し北ハ高麗と去ること一千
餘里東西ハ大海をかぎりとも前漢の鴻嘉三年にあたりて百濟
國の始祖溫祚といふ人もとをひききしなり總計六百七十
八年ふして三十代義慈王のとき國はろばいまハ三韓かまひ
獺貊沃沮等の國とあひせて朝鮮といふまゝなるか一本に如来
百濟にまゝまゝとて一千十二年といへりこれ事實をかんぐ
ざるの妄説なり又天竺にまゝまゝとて五百年といへるも錯謬の
をなすなり唐土の佛法より佛の滅後一千十六年と過て
後漢の明帝永平八年とせよめとてさうるか三尊佛天竺か
まゝまゝとて五百年ふして百濟國にまゝまゝといふ

水鏡三卷 神武天皇
 天皇 仁明天皇
 皇のいふる様者
 ちれと葛城仙人
 のつと記せ
 書

漢土の佛法より五百餘年以前のこととてまうもそのころは
 百濟といふ國の名もなかりし時なれば何ぞ佛像のつくりたまふこと
 あらんや繼令百濟開國より三尊佛その國ふまへりまふこと
 一千十二年の數あるべしとて日本紀 推古帝の三十二年に
 百濟國の僧觀勒上表の言ふ佛法漢土よりつくりて後三百年を
 経て百濟國つてこれよりまう百餘年とて日本に佛像
 経卷をつくり奉るとりてこれを考れば三尊佛天竺ふまへり
 まふこと一千四百年ふまへりとして百濟國は僅か百餘年とてまう
 たまふこととていなり水鏡ふも天竺より唐土に佛法傳りて三百年
 とまうも百濟國つてつくりて百年ありてこの國へつくりたまへりと
 りりこれ日本紀に符合せり元亨釋書平氏傳等もこれみ同
 されどもこれハ大數なりつとふといふも扶桑略記天慶五年の卷に如來

滅後一千十六年を歴て佛法をめぐめて漢土よりつくりたまへり四百十六年と
 まふこと日本にこれなりとてこれ中華と百濟をひとくかふとて
 たる年數なりいづれかもの町板縁起に天竺五百年百濟千年とて
 たるはかくもいふもあつてぬことなり彼書をみん人まじふことなれ
 粵小百濟國王の夢に光三尊の如來王宮の空中にあらはれ
 たまひ我天竺ふありて衆生を濟度とること尚矣今也この
 國小化を移さんとて汝宜く護持とてと告たまへり大王
 夢覺て奇異の思をなし遙か虚空を瞻仰すれば如來現に
 住立して光明をてしたまへり此時大王深く信心を發し
 香を焚て請ふ奉る三尊佛即殿中よりたまひけり



こゝにおいて大王歡抃欣躍してその國に伽藍をたて、
一光三尊の如來と安置しあまの僧を居あさて奉事
供養せよとあさてられけり

舊記に百濟王とのちあるてその名を關たるゆゑの王といふ
ことをとゞめて朝鮮史に第十四代の枕流王とてめて佛法を信ぜられ
こととせられたれども日本紀に載られたる觀勒の上表を以てかんぐられ
枕流王よりも五六十年の後三尊佛百濟國に來臨たまふらん孰かも
王の名を漏せしゆゑその時代分明なかりけりといふる小町版の假名
縁起にこのときこの王と聖明王といひ聖明王は第二十五代の主にて
在せし明禮王と稱しあまの僧と聖明王といひこれ三尊佛と
日本にあらりてまつり人なり其むね日本紀につまびしくかなれば

その時の王にあつたこと明なりまゝかの本に宗明王推明王濟明
王などいへる名と記されども百濟國三十代のうちあつる名の王ある
ことなりこれ舊記に王の名と關するゆゑの本の撰者それと補ひんと
て百濟の條下にいふて冗長く新奇とて却て古正の傳と汚せり

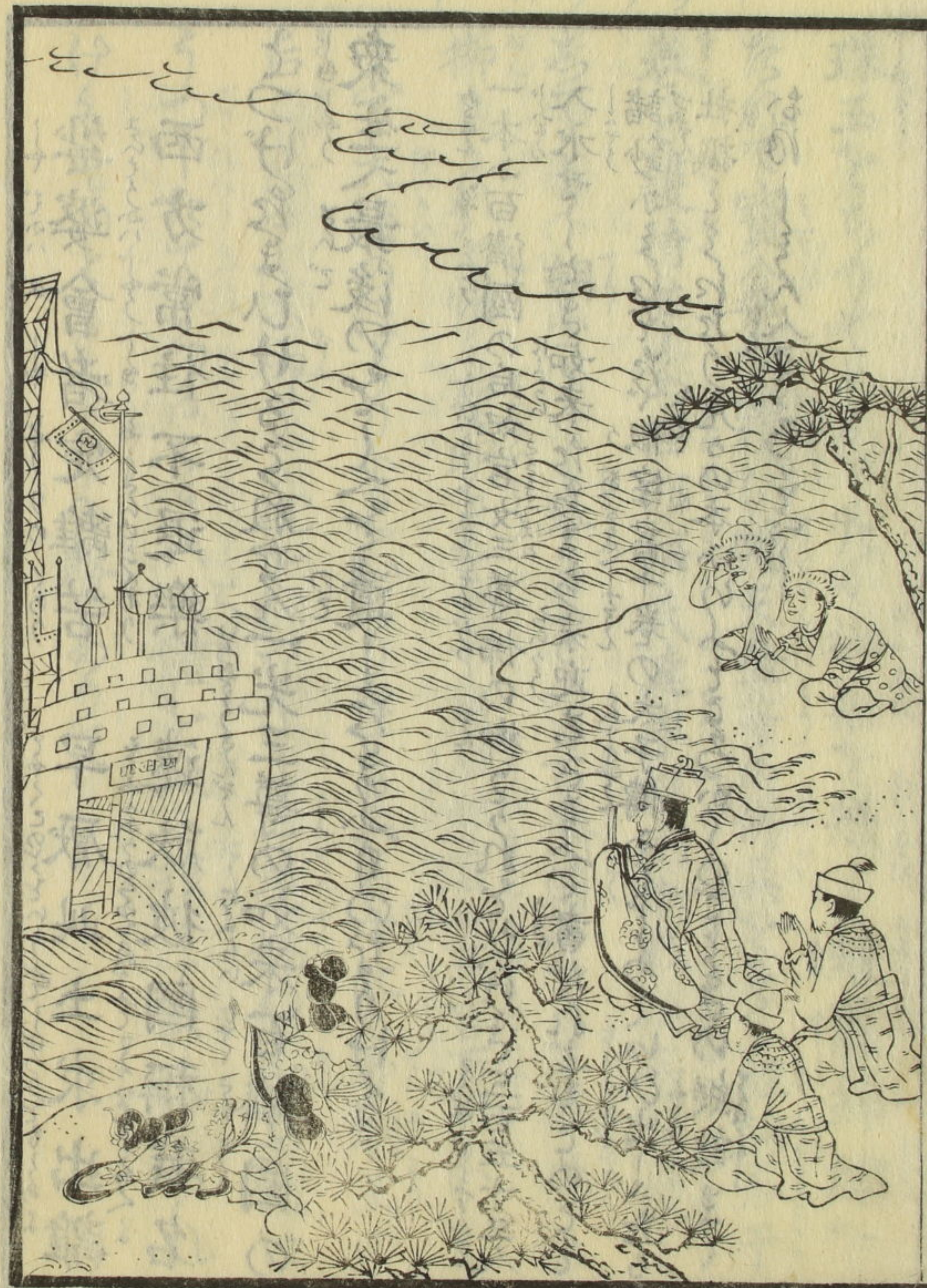
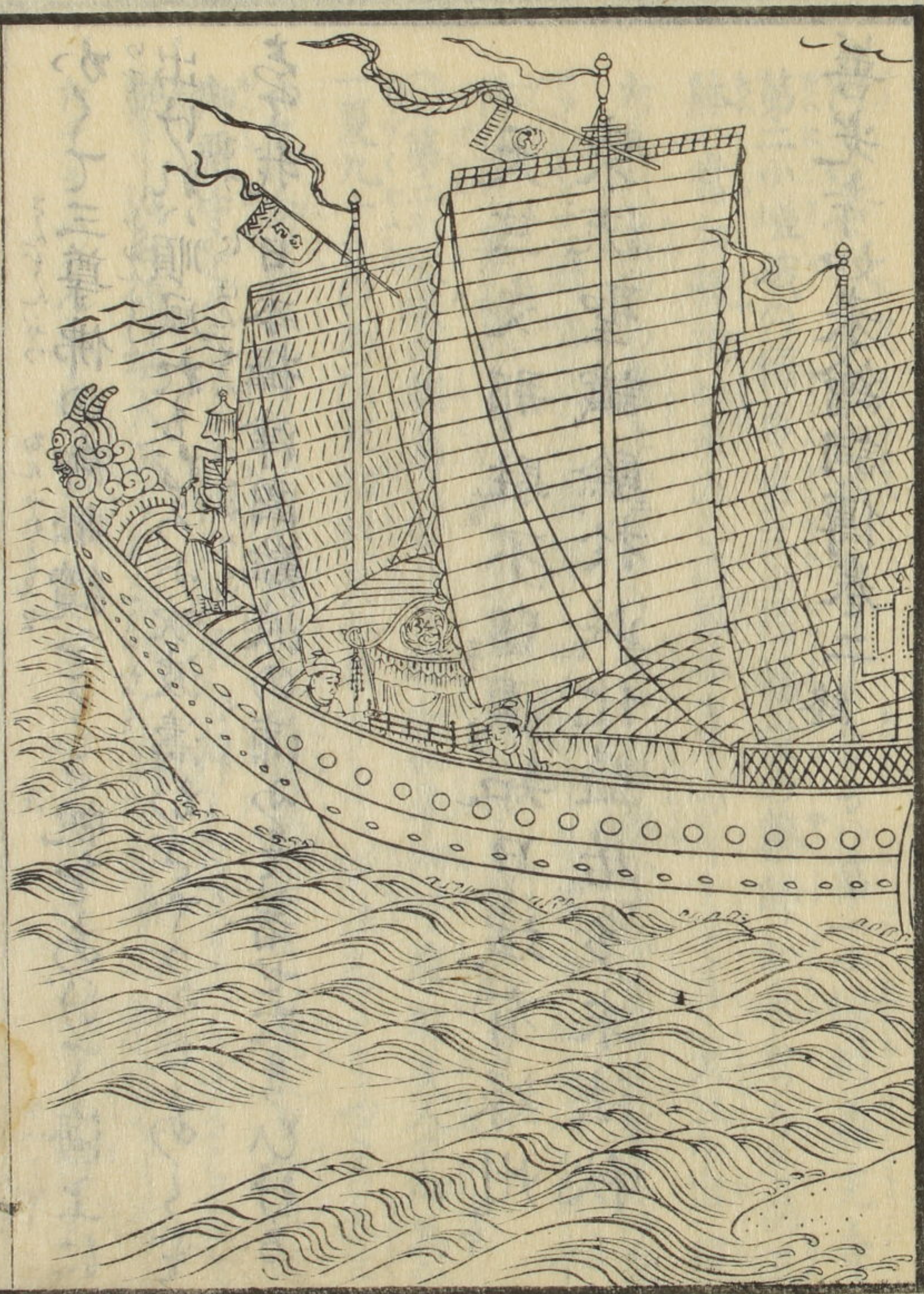
それより百有餘年の春秋を歴て聖明王の代にありて
三尊佛つげてのたまひ東方の日本國に有縁の
國なり我らの地ふつて化益せんとかの速に我像を
つくすべしとの佛勅あまのありければ聖明王もあま
あまの今日本にあらりてまつるべしとて金銀

西部地名ヲ
姫氏ハ姓ナリ
達率官名アリ
怒唎斯致契ハ
その名ナリ

珠玉とちりぢめあつた御船を艤し綾羅錦繡を
たれて寶龕を覆ひ幡天蓋等の佛具とて經論若干
卷を護持せしめ西部姫氏達率怒唎斯致契等と使と
あてて朝ふこと奉るふこの日百濟國かてハ三尊佛の
御よりれを惜み聖明王とて后妃官女百官百司ふける
まで大海のほとりふえかちたてまつる中にも聖明王の
后ことさふ御よりれをかちて三尊佛を御ふねに
うつたてまつるともハ五體と地ふ投げてなげかれ
けるそのとき空中ハ聲ありて

娑婆會者定離苦 早厭此土求出離
西方常住不退樂 速欣彼國稱我名
とつげたまひけるこれなん一光三尊の如來百濟國の
衆生へ最後のとて遺したまふりのなりける

一本ハ百濟國の後妃官女三尊佛の御よりれをなげて三百五十三人
入水せしとき如來たもち來迎せしと書たれどもこのこと
諸鈔ハいふとて假字書十卷の太子傳ふていひ出たる
杜撰とてたり凡その本ハいふところかのごとこの綴談も
おほしき人ころまき



かくて三尊佛の御船纜ととも帆をあげて海上に出ければ順風れもむろふ吹波濤おどやうふ日あゝど
あて我日本攝津國難波の浦あぞ著せたまひける

天竺支那駐不留須知日域有縁州
東流聖識驗於此化益居多末法秋

善光寺如來繪詞傳卷二 終

附てり日本三如來とまう一奉るハ第一小信州善光寺
第二小嵯峨の釋尊第三小因幡堂の藥師如來なりこの三
躰ハ當初釋迦如來のこの界ふまゝくしとて天竺小出現
たまひ其のち唐土かゝり今ハ日本小まゝなりたゞゆゑ
これと三國傳來の靈像といふ於中善光寺如來ハ日本
佛法の最初なるゆゑその來由國史にも載られたり
○第二小嵯峨の釋尊ハむろ一釋迦如來御母摩耶夫人の御爲か
一夏九十日のあいだ忉利天かまゝりて說法あゝとて天竺
めてハ御弟子をめぐめ國王大臣長者居士の諸人も如來の
御畱守をうなりと朝夕如來を拜したてまつてまゐることと
歎けゆゑ優填大王これを憐れ爲小如來の御容とてつ
たてまつることと發願あゝとてふおいて毘首羯摩天と

摩訶摩耶經二卷
蕭齊沙門釋曇
景譯

ける天人あまぐり梅檀香木をもちて如来の尊容を刻
たてまつり祇園精舎に如来のつねくまゝに處に置て
御留守のあひだ生佛の御身代として御給仕をな
たてまつるおぼどなり九十日の御說法をりて如来切利
天よりかへらせたまふ日その御木像をうづりて如来を迎
たまふそのとき如来御手をとて木像の頂をわづく善哉と
我いほどもなく涅槃入べき身なりとわづくこのま
るまゝりて衆生と濟度せざるべきことなれば我先ふたて歩
まれ我いほどもこの後つきて行んとするまひたれば木像
たづち生佛の先ふたて祇園精舎にかへらせたまひける
右切利天御說法のことハ摩訶摩耶經にもび佛昇切利天為母說
法經等にも優填王の佛像をつくりたまふことハ觀佛三昧

為母說法經三卷
西晉三藏法師
護譯
觀佛三昧海經十
卷東晉三藏法師
佛陀跋陀羅譯

羅琰三藏ハ羅
什の父なり

經小出ちうくハ法苑珠林卷四十四にもなたり同卷の述意にも優
填王とめて梅檀の像と刻ハ波斯匿王はじめて黄金の像と鑄るの
文あり就てさるべし
爾来この御木像天生ふまゝとて一千三百餘年なり後小
惡王ありて佛法をつぶせしとき鳩摩羅琰三藏といくる知識
この如来を負て唐土の西なる龜茲國に逃きたりたまふその
道もぐるも名ふ負ハ流沙慈嶺の難所ハ尊像反て羅琰
三藏をかばせたまふゆゑ十萬八千里の行程も不日
して唐土につりせたまふとや
世ハ本多善光信州小くづるとき畫はうとて如来を負たてまつれば
夜ハ如来善光を負せたまふとおぼにたるハ全くこのことの混れて
俗にひつゝするのとなり舊史と檢考ハ善光寺如来の信州に

くぐりたまふときハ 推古天皇より勅使をきて送りたまふゆゑ
善光たひより如来をおびてくぐりたるふいあゝとこのこと第六の
巻のりへり

かくて梅檀の瑞像ハ龜茲國かまゝもとこと二百餘年なり爰ハ
東大寺の沙門裔然法師宋朝かゝり一たびこの尊像を
拜して渴仰のおもひいたくも遂ハ佛工張榮といふ人と
あてあつたふ御うつゝの像を刻しめかの天竺より来り
たまふ正眞の本佛ハ變置て竊ハ日本ハ将来より嵯峨
の釋迦堂清凉寺の本尊となりたまふ時ハ一條院の御宇
永延元年のことなりされバ善光寺如来のくぐりたまふよりハ
四百三十六年の後なり

裔然の入宋ハ扶桑略記にも記されども尊像の将来ハ編年集成に

出たり彼寺の縁起ハ裔然歸朝の年代といはざるゆゑ今ハ編年
集成元亨釋書等かゝる

○第三ハ因幡堂の藥師如来ハもと天竺祇園精舎四十九院
のうち療病院の本尊として傳へり釋迦如来御手づくる
彫刻たまたま靈像なりとて思ふ小如来涅槃二百年の後に
惡王ありて祇園精舎を焼くも一時この藥師如来くぐり
飛テ龍宮にいせたまひます數百年の後日本因幡國の海中
よりあがりまゝに鱗蟲と濟度あたまふこと四十餘年のあひだ
とりや折しもその中納言行平卿因幡國よりありて不思議
の靈夢をかゝり網をかろせせて試るふたもちも藥師如
来の尊像海中よりあがりせたまふこと小於て因幡國小堂を
たてこれと安置し行平卿ハ都小還られける小其のち如

行平卿ハ阿保親王の御子シテ弘仁九年の誕生天長三年在原の姓をたまひ齋衡三年因幡守に任じ其國下向一元慶六年中納言にまゝ寛平五年七十六歳にて終たまひ今因幡堂の縁起ハ天徳長保の年號あるは後人傳聞の誤

来もまゝ虚空と踏て京都小きたりたまひ行平卿おもひかけたまひとまゝやれハ俄小佛とまゝ設のなりしゆゑ側小ありあハ基盤とまゝて先これへと請てたまひられければ如来虚空よりありて基盤のうへに立たせたまひゆゑ今もなほこの如来の跏趺座ハ基盤のまゝまゝかくて行平卿もあつた小堂とたて安置せられハいまの因幡堂平等寺なり恒ハ秘佛ふてまゝまゝせども天子御即位の翌年ハ勅會開帳ありもと因幡の國よりきたりたまひゆゑ因幡薬師とぞ稱てたまひ當初海よりよらせたまひハ村上天皇の天徳三年なれども京へ遷らせたまひハ一條院の長保五年四月七日の夜の事なれハ嵯峨の釋尊の本朝よりとりたまひハ十七年の後なり今嵯峨と第二

大納言從一位准后南朝詔して准大臣小住たまひ

こゝ因幡と第三とまゝハ勅願の前邊よりてその次第で雲而巳情以ハ北畠准后親房卿の神皇正統記ハこの南浮提ハ從後七ふ由旬里數を以て計られハ二十八万里なり天竺ハその中心にて地のめぐり九万里あり震旦ひろしといへども天竺よりまゝなれハ一邊の小國なり日本ハかの志とまゝなれハ海中ふあり南都の護命佛正小嶺の傳教大師ハ日本を中州なりと記されたりまゝハ南州と東州との中なる遠摩羅といハ州なるべし華嚴經ハ東北の海中ふ山あり金剛といふところあるハ今の大倭の金剛山のなりなりとまゝなれハ此國ハ天竺より震旦より東の大海の中ふありて別洲といふ神明のなりとまゝなれハ國なりといへり抑も日本ハ天地日月のあらんよりハ幾萬代を歴ても動ま

太政大臣位一位
關白准三宮後常
恩寺殿と号し又
桃園の禪閣とも
いふ御法名也

萬皇一姓の御國なれば唐天皇の靈佛もこの地ふ来りたまひ
わがく滅亡の患なり一條禪閣兼良公の日本紀纂疏玉の
うへに潔い法身なり鏡のよき照る般若なり劍のよき斷り解脫
なりとありて神代よりつゝまゝ三種の神儀小善て法報應
の三身と具へ代々の
天子いこゝに日の御神の御分身なればなり肉身の大日如来
なりこのゆゑ小梵天帝釋四天王も擁護まゝてかく靈佛と
本朝ふありたまふなりとも未世凡夫往生の捷徑ハ
たゞ彌陀の本願念佛の一行ありむろゝ空也上人伊勢内宮に
まうでたまふとき御宮のうらより
彌陀たのむ人をむろゝとてなすば此國の神といふれど

一言芳談小撰号
を置いといて
兼好法師の徒然
草かこの書と
引れたり

と御詠歌ありこと空也上人繪詞傳ふなりまゝ惠心僧都一
七日と期して
太神宮小衆籠て出離生死のりを授けたまへといのりたまふとき
満願の夜ありて御宮のうらより軍けだき女姓一人現れ
いで
太神宮ハ本覺の都へ歸りありまゝとこれいゆる守の侍るなり
末代の衆生出離の要道とたづねるなりあゝ彌陀佛を念ぜよと
まゝむきまゝいふをいふれつと告げたまふこと一言芳談と
りし書よとねたり宜哉釋迦如来小五百の大願あれども末世濁惡
の人のちちハ一向專念無量壽佛とてくたまへり藥師如来小も
十二の願ありて女人成佛の御誓もまゝとせども阿彌陀經の會
上ハ東方恆沙の諸佛とて小唯念佛の一行と證誠とて五

如來傳卷二三女身五

障垢穢の女人をさうびきたまふことを以て三國傳來の三如
來をもぐこの邦におきたりたまふ御さうびのほど推て
さうべー

南無阿彌陀佛

本字田川

障垢穢の女人をさうびきたまふことを以て三國傳來の三如來をもぐこの邦におきたりたまふ御さうびのほど推てさうべー

